

仲 原 正 治 のまちある記

「県庁所在地規模の都市の課題」



左：郡山市ビックパレット近くにある被災者住宅

右：「電力王」松永安左エ門の95歳の時の書（小田原市）

目次：	「映像と音楽の街」ー川崎市	2 P～
	ウナギと音楽のまちー浜松市	8 P～
	「4核」の商店街、音楽都市ー郡山市	14 P～
	浦和と大宮ー個性を活かせーさいたま市	25 P～
	小田原評定は街づくりに似合わないー小田原市	34 P～

1) 「音楽・映像のまち」ー川崎市



競輪場の隣に川崎球場がある。横浜へフランチャイズが移る 1978 年までは大洋ホエールズ（現、横浜DNAベイスターズ）の拠点だった
撮影：2011 年 10 月 16 日



六郷橋。渡るとすぐに東京都になる
撮影：2011 年 10 月 16 日



京浜急行の原点である「大師線」（写真：仲原正治、撮影：2011 年 10 月 16 日）

川崎といえば近年、「若者の町」というイメージが強くなっている。かつては「公害の町」「ギャンブルの町」というネガティブなイメージが強かった。京浜工業地帯を支える労働者の町として栄え、プロ野球球団もあり、日本の高度成長を支えた街だった。しかし、臨海部の埋め立てによる大規模工場の立地によって、大気汚染が進んだ。スモッグ（スモークとフォッグを併せた造語）という造語ができるほど、空がぼんやりとしていた時期もあった。多くの自治体が手を引くなか、今も川崎競馬・川崎競輪という公営ギャンブルは続いている。川崎市は、このイメージを払拭すべく文化芸術によるまちづくりに注力し、ようやく実り始めてきている。

東京と横浜にはさまれた川崎は工業都市への道をたどる

東京から多摩川を渡ると、すぐに川崎市に入る。東海道の 2 番目の宿場町で、江戸時代はこの川を渡ると江戸を離れるという寂しさを感じ、逆に神奈川から来ると、さあ、江戸に着くという気分になったようだ。当時から川崎には「川崎大師」があり多くの参詣客を迎え入れていた。渡河地点として多摩川「六郷の渡し」も栄えていた。

江戸幕府は 1859 年に鎖国を解き、横浜を開港の場として、居留地を設け、世界の窓口として位置づけた。政治経済の中心である東京と“国際都市”横浜を結ぶため、1872 年（明治 5 年）に日本最初の鉄道（新橋ー横浜）が開通。その中間の川崎に駅が設置されることになる。

「海に近い」「東京と横浜の中間にある」という立地を活かし、当初は工業振興を目指した。最初に川崎に工場を建設したのは、横浜製糖（合併で現在の明治製菓）である。1907 年（明治 40 年）のことだった。その場所は、現在の川崎駅西口の「かわさきテクノピア」であり、「工業都市川崎発祥の地」のプレートが川崎市産業振興会館前に設置されている。

その後、1908 年には東京電気（現在の東芝）、1909 年には日本蓄音器（現在の日本コロムビア）が進出する。浅野総一郎は 1908 年に渋澤栄一、安田善次郎らと「鶴見埋立て組合」を結成し、大企業の進出を促した。埋立ての進行にあわせて、1912 年には日本鋼管（現在の JFE）などが進出した。

私鉄も京浜急行の前身である大師電気鉄道が 1898 年（明治 31 年）に一部開通。その後、品川や横浜に延伸し、1931 年には品川ー浦賀間全線が開通した。川崎ー登戸間の南武線も 1927 年に開通する。

埋立てはその後も続いた。明治後期から急速に工業化が進んだ川崎市では、自然の

仲原正治

の

まちある記

海岸線がどんどんなくなっていった。昭和 30 年代になると、浮島町、千鳥町などが造成され、鉄鋼、電力、石油コンビナートをはじめとする様々な工場が進出し、京浜工業地帯の中核をなすようになっていった。工場から排出される煙、工場へ向かうトラックや埋立て地へと続く幹線道路を整備するため流入するダンプカーなどの排気ガス——。1955 年頃にはイチジクの葉が一夜で大量に枯れるという事件がおきるほど大気汚染が深刻化し、川崎公害裁判が起こるまでにいった。



川崎テクノピアと工業都市川崎発祥の地のプレート(撮影：2011 年 10 月 16 日)



川崎競輪場。早朝から車券が売られている
撮影：2011 年 10 月 16 日



川崎競馬場。秋の日曜日、場内を開放して感謝デイが開催されていた
撮影：2011 年 10 月 16 日

川崎のもうひとつの顔—ギャンブルと労働者の町

川崎には「ギャンブルの町」という、もうひとつの顔がある。競輪場、競馬場が駅から徒歩圏内にある。戦後間もない 1949 年（昭和 24 年）には川崎競輪場がオープンし、翌 1950 年には第一回川崎競馬が開催された。公営ギャンブルの 60 年余にわたる歴史の中で、公営ギャンブル事業から撤退する地方自治体が増えているが、川崎は違う。隣接する花月園競輪場が 2010 年に廃止となったが、川崎では現在も続いている。

公営ギャンブルとは、中央競馬、地方競馬、競輪、競艇、オートレースの 5 競技を指し、競馬法や自転車競技法などの特別法で認められたものを言う。競馬の歴史は古く、幕末に横浜で洋式の競馬が開催されており、横浜根岸に日本最初の洋式競馬場が開設されている。これは治外法権下で行われた例外のものであり、日本独自の公営のものとしては 1906 年に公認競馬の組織が開設されたと記録にはある。公営ギャンブルのうちの、中央競馬を除く 4 つの競技は、自治体が施行者になって

いる。戦後に戦災復興を目的として始まった。そのため、収益は学校の建設など公共事業として使われてきた。

戦後の復興という目的で開設されたため、現在はその役割を終えていると思うが、長い期間、自治体の財源としてきたために、各自治体ともすぐにはやめることができなかった。しかし、バブル経済の崩壊とともに、大衆のギャンブル離れ、入場者の減少による売り上げの低迷から赤字団体が続出した。自治体の持ち出しが多くなり、廃止を決める自治体が多くなっていった。

川崎市の行財政改革プラン(2002 年)によると、1995 年(平成 7 年)度から競馬は実質的には赤字決算となっており、競輪事業から借り入れて対応している。2000 年度には神奈川県と一部事務組合を設置し経営改善を行ったが、同年度は約 31 億円の赤字となった。今後も一般財源への繰り入れは期待できない状況になっている。競輪事業会計では 2010 年度は 3 億余の黒字を計上している。ただし、今後の財政的な期待はできないレベルである。

競輪、競馬で街がにぎわうという効果は、多少は考えられるものの、廃止の方向に進むのが現実的ではないだろうか。

「映像のまち」「音楽のまち」の目指すもの

川崎のマイナスのイメージを最初に変えたのは、シネマコンプレックスの「チネチッタ」だろう。昔から川崎にあった同系列の映画館をひとつのビルに集約して 1987 年にオープンした。イタリアの撮影所の名前を付し、イタリアらしい街並みを作ったことによって地域のイメージが一新された。

シネマコンプレックス(以下、シネコンという)という言葉は、そのころはまだ一般的ではなかった。1984 年に西友の大森店に「キネカ大森」という 3 スクリーンの映画館が、日本初のシネコンと銘打って開館している。ただし、それ以前にも横浜では 4 スクリーンの「横浜東宝会館」が 1956 年にオープンしている。(5 スクリーンの映画館ビル「相鉄ムービル」が 1971 年にオープンしている。)シネコンの日本の発祥は不明確である。

チネチッタは、それまでの映画産業が個館で映画だけの営業だったものを、商業施設などを配置し、イタリア風の街並みを整え総合的なエンタテインメント施設にしたことによって多くの集客を得た。最近まで、日本一の集客を誇る動員数、興行成績を上げていた。この成功がきっかけで日本中にシネコンが普及した。現在のシネコンブームのさきがけと言っても過言ではない。

川崎駅周辺には、チネチッタ(12 スクリーン)以外にも TOHO シネマズ川崎(ダイスビル・9 スクリーン)、109 シネマズ川崎(ラゾーネ川崎・10 スクリーン)ができ、3 つのシネコンが競いあっている。また新百合ヶ丘地区には、長年にわたり人材を



チネチッタ。イタリアの街並みを再現した風景で話題になった
撮影：2011 年 10 月 16 日



チネチッタ内の 12 スクリーンの映画案内ポスター
撮影：2011 年 10 月 16 日

仲原正治

の

まちある記



川崎市役所本庁舎。1938年（昭和13年）築の歴史的建造物である
撮影：2011年10月16日



川崎市役所のすぐ裏には堀之内地区のソーブランド街がある
撮影：2011年10月16日



「ミュージザ川崎」シンフォニーホール入り口
撮影：2011年10月16日



川崎駅前の商業施設には多くの客が訪れる。
撮影：2011年10月16日

育成していた日本映画学校が2011年に正式に日本映画大学として開校した。KAWASAKI しんゆり映画祭も17回を数え、この地域にもシネコン（ワーナー・マイカル・シネマズ・9スクリーン）ができています。このほか、日本テレビの生田スタジオや臨海部には川崎5スタジオなど映像作品づくりの基盤ができた。官民共同で「映像のまち・川崎推進フォーラム」も立ち上げている。さらに、川崎市は市役所本庁舎（昭和13年築）を撮影に積極的に開放するほか、市内各所での撮影にも協力しており、「撮影されるまち」のアピールにも力を入れている。

駅前再開発を契機に、音楽を中心としたまちづくりを進めてきた。「ミュージザ川崎」のある地域は、老朽化した市営住宅、公団住宅、旧国鉄社宅、JR変電所などがあった。駅前の立地を活かして、第一種市街地再開発事業によって都市機構が開発を進め、オフィスビルとシンフォニーホールからなる複合施設へと姿を変えた。オフィス棟は特定目的会社、ホールは川崎市が取得して事業を進めた。

東京交響楽団が2002年にミュージザ川崎をフランチエイズホールとし、定期コンサートを行うことを決めたことで、施設の運営に弾みがついた。市は2004年4月に「音楽のまち・かわさき」推進協議会を発足させ、音楽を中心とした市民の多彩な文化・芸術活動の創造を通じた地域社会づくりを進めることにした。川崎市制80年記念で誕生した「ミュージザ川崎シンフォニーホール」は、2004年7月のこけら落としで、マーラーの交響曲第8番「千人の交響曲」を公演し、追加公演を行うほど好評だった。

今後の課題は、「音楽のまち」というキャッチフレーズがミュージザの活動だけでなく、市民にどう浸透し、協働で進めていけるかになる。推進協議会のホームページには、「市内にある音楽資源・音楽環境を活用して、音楽を中心とした芸術や市民文化の創造を通じ、まちに音楽があふれ、豊かな心を育むとともに、活力のある地域社会の実現や新たな産業機会の創出など、幅広い効果による「音楽のまちづくり」を民間活力を活用して推進する」と記されている。ホールでの公演のほか、アジアとの交流や地域と触れ合う音楽振興ということで、東京交響楽団の巡回公演や地元出身の坂本九の顕彰なども行っている。ミュージザ川崎に続き、駅前再開発による都市型ショッピングモール「ラゾーナ川崎」などの商業施設の集積で、川崎駅周辺に若い人が集うようになってきているのは確かだ。

残念ながらミュージザ川崎は現在、東日本大震災による被害でシンフォニーホールが閉鎖されている。ホール内の天井仕上り材が落下し、これに伴って壁面、床面、客席が損傷した。復旧工事を実施中で、24年度末までには復旧を終える計画になっている。

西口の再開発と東口の賑わいが“ごった煮”となった町



残す意義が感じられないミ
ューザ川崎前広場の JR 変電
所の壁
撮影：2011 年 10 月 16 日



ラゾーナ川崎と背後の住宅
撮影：2011 年 10 月 16 日



地下街アゼリア入り口
撮影：2011 年 10 月 16 日



秋の祭りでのぎわう仲見世
通り。
撮影：2011 年 10 月 16 日

久しぶりに川崎を訪ねてみて、西口の姿がまったく変わってしまったことに驚いた。西口地区は老朽化した住宅団地や大規模な工場跡地のため、再開発をダイナミックに実施できるメリットがあった。現在は、明治製菓や東芝堀川町工場のあった場所が、オフィスビル（ソリッドスクエア）や商業施設（ラゾーナ川崎）などに変わってしまっている。

明治製菓は関東大震災後に、ヨーロッパの城をイメージした工場を建設し、デザインも素晴らしく菓子工場としてとても似合っていた。東海道線で東京に向かう時に、川崎駅を出発してすぐ左方向に見える瀟洒な建物の姿を、いつも楽しみにしていた。しかし、いまは正直、つまらない車窓風景となっている。

川崎駅前には商業施設、オフィスに付随して超高層住宅も多く建っている。東京から近いということ、かつての「公害のまち」というイメージが払拭されたこともあり、需要が多くなっているのだろう。

西口を歩くと新しい街の息吹を感じる。ただし昔の面影はほとんど見ることはできない。JRの旧変電所は赤煉瓦建造物だったが、すべて壊され、その名残としてミューザ川崎前の広場に壁が少し残っているだけだ。記憶に残るものが何もない街というのは、まち歩きしてもつまらない。個性的で魅力的な都市景観や歴史的建造物の保存といった都市デザインの意識が感じられず、デベロッパーに任せている効率だけの計画になってしまっている。行政の指導力がそこまで及ばなかったことは、まちづくりにとってマイナスだと言える。

東口地区は昔のままの地域が多く、街が渾然としている。JR川崎駅東口には日本有数な地下街である「川崎アゼリア」があり、多くの人が訪れている。アゼリアを抜けると銀柳街、仲見世通りなどの繁華街があり、地下街と周辺の商店街がうまくつながっている。景気はあまり良くないはずだが、街をあげていろいろなことに取り組んでいる。まちが活き活きしているのだ。訪ねた当日も、秋祭りが開かれており、露天に多くの店が出て、大勢の人が楽しんでいた。

川崎市役所の裏手には昔からの宿場町の名残か、堀之ノ内地区という関東でも有名なソーブランド街がある。競馬場からも近く、朝から客の引き込みが行われている。町には表と裏があり、この地域はほとんどが風俗店で、他のまちとは異質な雰囲気が流れている。海側に少し歩くと、焼肉の店が連なるセメント通り（コリアンタウン）もあり、食の文化は豊かだ。

行政が狙っている「音楽のまち、映像のまち」というキャッチフレーズは、川崎駅東口からはあまり感じられない。しかし、東口には労働者の町として栄えてきた猥雑さや混沌が残っている。街は生きており、成長していくものだ。行政が意図するものと地元で長く暮らし生活してきた人たちが作っていく「まち」は自ずと違ってくる。

仲原正治

の

まちある記

西口、東口、渾然一体となった街が川崎である。新旧の対比の中で、自分の好きな町を選べる楽しさもある。東京と横浜の狭間で、日本の高度成長を支えてきた川崎だが、西口を中心とした「音楽のまち」と昔ながらの東口、それらが“ごった煮”となった個性ある町と言えるのではないだろうか。



堀の内地区の歓楽街(左)の交番には「歓楽街対策本部」の看板が掲載されている。

2) 「ウナギと音楽のまち」ー浜松市

小学生の頃、東海道線で京都、大阪方面に行くときに、必ず、浜松駅で「うなぎ弁当」を買ってもらった記憶がある。就職して浜松近くに出張すると、必ずといっていいほど、夜のお菓子「うなぎパイ」に遭遇する。私にとって浜松はウナギの町だった。しかし、現在、浜松市は「日本の楽都」と呼ばれるほど日本一の楽器製造を誇り、「音楽のまち」としてまちづくりを進めている。

徳川家康が城を構え、東海道の間地点になり、まちが栄えた

関ヶ原の合戦の30年前、1570年、徳川家康は浜松に城を構え(引馬城を改築して入城)、17年間に渡り、ここを中心に数々の戦いを繰り広げてきた。その後、家康は駿府(静岡)、江戸へと移り、政治経済の中心は江戸(東京)になっていくことになる。1601年に新たに東海道が整備され、浜松には宿場が設けられ、以後は城下町であるとともに東海道の主要な宿場町として栄えていく。

明治政府になり廃藩置県政策により1871年(明治4年)に浜松県が置かれるが、5年後には静岡県と合併し、県庁所在地が静岡に移り、浜松には支庁が置かれることになる。1888年(明治21年)に市・町村制がひかれ、翌年、浜松町が誕生する。1889年に東海道線も全線開通(新橋―神戸間)し、西と東の間地点であることもあり、1897年(明治30年)ごろには、日本楽器(現ヤマハ)、帝国製帽(現テイボー)、木綿中形(現日本形染)などが設立され、産業の基盤が造られた。明治44年に市制が施行され浜松市が誕生するが、当時は人口約36,000人余の小さな都市だった。その後、楽器、繊維、形染などの産業が盛んになり浜松の基盤を支えてきた。第2次世界大戦では、近くに航空基地や軍需工場があったため、何回もの空襲を受け、特に昭和20年6月18日は浜松大空襲として、多くの死者を出し、全焼家屋も16,000戸にのぼった。

戦後は、工業振興に力をいれ、繊維、楽器、オートバイの3大産業が大いに栄えた。この背景には、1887年(明治20年)に山葉寅楠(やまはとらくす)が日本で最初にオルガンを製造したことに始まる。1900年(明治33年)には日本楽器がピアノの製造をはじめ、日本の楽器製造の第一人者として活躍し始める。また、1946年には本田宗一郎が浜松市に「本田技術研究所」を設立し、自転車用の補助動力エンジンを売り出し、翌47年には自転車用補助動力エンジンを搭載した「ホンダA型」を販売し、現在のホンダの基礎をつくった。このときにつくったホンダA型は排気音から「ポンポン」と呼ばれて親しまれた。

こうした歴史の中で、現在でも、ヤマハ、河合楽器、ローランドなどの音楽関係、



現在の天守は1958年(昭和33年)に鉄筋コンクリート造で再建されている。江戸時代には天守が存在しなかったようで、模擬天守又は復興天守とも呼ばれている。
撮影：2011年11月19日



若き日の徳川家康像
撮影：2011年11月19日

ホンダ、スズキ、ヤマハなどの輸送機械などが主な産業となっている。

ウナギが浜松の一番のイメージか？

ウナギの養殖は 1879 年（明治 12 年）に東京深川で、服部倉次郎がウナギの幼魚を育成したのが始まりとされている。その後、服部は浜名湖が養殖に適していると考え、1900 年（明治 33 年）に約 8 町歩（約 8ha）の養殖池を作り、クロコウナギ（体調 15 cm くらいに成長したもの）を取ってきて育てる手法でウナギの養殖を始めたと言われている。（原田仙右エ門が 1891 年（明治 24 年）に 7ha の池を作り養殖を始めたと書かれているものもある）現在は、シロコ（シラス）ウナギという卵からかえって間もない稚魚を使って養殖している。

浜名湖の養殖が盛んになった要因は、ウナギの稚魚が遡上してくること、地下水が豊富で気温が温暖など自然条件に恵まれていること、関東と関西の中間で、どちらの消費地にも近いことなどがあったことと考えられる。

町のいたるところに「うなぎ」の看板があり、店の前を通ると、特有の香りがして好きな人間にはたまらない。山形出身の歌人斎藤茂吉は、毎日でもウナギを食べたいと実践していたと言うが、私もウナギ好きで、毎月 3 回ほどは食べている。今回も浜松で食べたが、関東関西の中間点だが、ウナギは関東風（蒸してから焼く）で身が柔らかく美味しかった。

日本では、夏の土用の日にはうなぎを食べるという風習があるが、滋養強壯のうなぎは高温多湿の日本には最適であり、夏バテに良いとされていて、こうした風習が定着したものだと思う。現在、消費のピーク時 7 月には、海外からも輸入しており、国内の生産では間に合わないのが現状である。浜松の人に言わせると、11 月ころのうなぎは一番脂が乗っていて、美味しいとのこと、秋の土用の日が設けられていた。お土産物もウナギに関連したものが数多くあり、浜松土産の代表となっている「うなぎパイ」はいたるところで売っている。むろん、私も買ってきた。ウナギの年間国内生産量は約 2 万トンで、中国や台湾から 5 万トン以上の輸入が行われており、年間 7 万 3 千トン余りが日本で消費されている。養殖の日本一は現在、鹿児島県になっているが、ウナギというと浜松だというイメージがついているのは、歴史が長く、地域に浸透していること、うなぎパイが土産のシンボリックな存在になっているのが原因ではないかと思う。

大規模な再開発、区画整理による中心市街地の行く末は

浜松を訪ねた日は、雨と風が強く、街を歩くのがとても厳しい日だった。駅を降りると構内に南北に通じるコンコースがあり、自由に行き来ができる。繁華街となっている北口には地下通路があり地下から 4 つの方向に向かうことができる。駅前に



浜松市内のウナギの看板
撮影：2011 年 11 月 19 日



名物うなぎパイの看板。いたるところで販売している。
撮影：2011 年 11 月 19 日



浜松駅のコンコース
撮影：2011年11月19日



駅前の地下街の入り口。
撮影：2011年11月19日



浜松アクトシティには2300
余席を誇る大ホールが設置
されている。
撮影：2011年11月19日

右：浜松駅前の都市再開発と
中心市街地活性化基本計画
区域図(浜松市ホームペー
ジ)

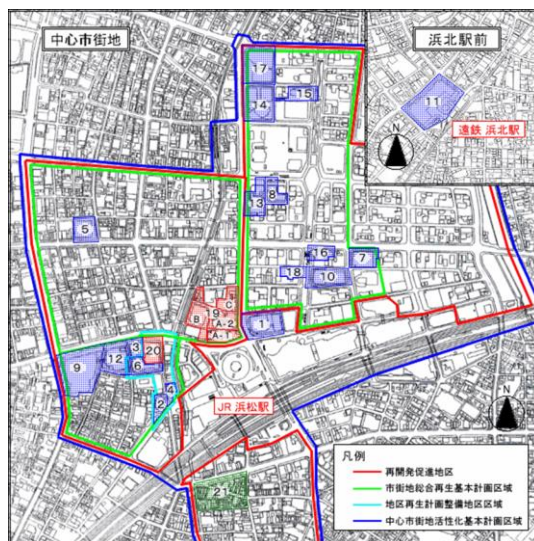
立つと、いくつかのオフィスビルや商業施設が建っている普通の市街地が展開されており、特徴があるようには見えない。

ただ、右手を振りかえると高さ約212m、45階建て超高層ビル「アクトシティ」が存在感を示している。ここは、1994年(平成6年)にオープンした浜松の国際交流文化拠点であり、大・中ホール、コンgresセンター、展示イベントホール、交流センター、ホテルがあり、浜松文化の中心となっている。隣接して楽器博物館もある。浜松市は2005年(平成17年)に12市町村が合併し、人口約80万人となり、2007年度に政令指定都市に移行している。また同年、「浜松市中心市街地活性化基本計画」を策定し、総理大臣認定を受けている。計画地域は150haと大きい。そこでは、浜松型コンパクトシティを目指し、市街地の無秩序な拡大を抑制し、各地域の集積によるコンパクトで新しい価値を創造する都市づくりを進めるとしている。

基本目標として「政令指定都市浜松の顔にふさわしい中心市街地の形成」を謳い、

- ① 華のある商業空間を誇る賑わいある中心市街地＝大規模商業施設と商店街が一体となった魅力ある商業空間の形成を進めるため、大規模商業施設の誘致。
- ② 誰もが住みたくする潤いある中心市街地＝質の高い都市型住宅の整備と魅力的な都市文化の演出による都心居住の増加。
- ③ 新しいビジネスを生む活力ある中心市街地＝「やらまいかスピリッツ」が息づく創業都市。浜松にふさわしい業務機能の集積。 となっている。

「やらまいか」とは「やってみよう」、「やろうじゃないか」とかいう方言で、チャレンジするという意味合いがある。今年、2011年(平成23年)7月1日に浜松は市制100年を迎えたが、「未来へ輝く『やらまいかスピリッツ』～NEXT100～」を基本コンセプトに、「元気で活力のある都市・浜松」の更なる発展を目指している。



この中心市街地活性化計画の150haの一部を歩いてみた。別図のように、都市再開



東地区区画整理事業地区内の道路だが、人通りは少ない。
撮影：2011年11月19日



静岡文化芸術大学
撮影：2011年11月19日



東地区区画整理事業地区内の民間の建物は基準がないようでバラバラだ。
撮影：2011年11月19日



遠鉄百貨店
撮影：2011年11月19日



雨の日でも若者が集う肴町
撮影：2011年11月19日

発事業が駅周辺で次々に行われ、18箇所の再開発が終了し、現在も2箇所で進められている。また、並行して区画整理事業も行われており、駅前周辺を大規模に変えようとしている。

再開発地区では大型の商業施設や住宅、ホテル、公共施設などが入居しており、都心居住が快適にできるように計画されている。

東地区区画整理事業には、理路整然とした町が誕生している。

アクトシティ浜松から静岡文化芸術大学に至るエリアを、市内で働くデザイナーやクリエイター等が日々の仕事の後にも集まることのできる環境を整えるなど、創造的人材が集積し先端的な発信を行う拠点となるような誘導策を展開し、知的刺激のなかで、交流が行われる創造拠点とすると浜松市文化振興ビジョンには記載されている。そのため、この地区は、道は広く、公園も大きく取られ、防災上は非常に優れた街になっている。道路・公園は行政の主導で照明やサインなどのデザインも整えられている。地域内の静岡文化芸術大学の校舎はきちんとした建築デザインになっている。しかし、個人所有の土地の使われ方、デザイン指導などはまったく考えられていないと思われる。建物は高さもマチマチ、色彩はチグハグで、とても創造的な交流が行われるようなものにはなっていない。まちづくりに住民や権利者が参加しているように思われない。もしかすると地域のコミュニティも以前とは異なり希薄になっているのではないかと感じてしまう。

一方、若者たちはどのようにしているのか、風雨の中を歩いてみた。再開発の商業施設（ザザシティ浜松）や新浜松駅前の遠鉄百貨店には、ふつうに買い物客が来ている。また土曜日の夜なので、いくつかの会議がアクトシティでは行われ、オペラコンクール関係事業が着々と行われるなど、コンベンション機能も動いている。そこには関係者中心で人はあまりいなかった。大勢の若者たちは飲食店が集積する繁華街の「肴町」で週末の夜を楽しんでいた。そこは、再開発の地域ではなく、普通に発展してきた町だ。再開発ビルの中で、酒を飲んだり食事をしたりするのは家族づれが主で、若者やサラリーマンは昔の街並みで飲む方が落ち着く。

どの町を訪ねても、行政主導のまちづくりを進めている地区にはあまり若者が集まらない傾向があるように思える。むろん、安全・安心のまちづくりを進める上で、行政の力は必要だと思うが、それ以上に町の人が頑張っている場所の方が魅力を感じる。行政が主導で再開発をして、大型商業施設などを誘致することが、市民生活の向上に繋がると言う、間違った見解で開発を誘導することが果たして良いのだろうか。そのことで、地域の歴史や風土、個性をなくす働きをしてしまい、シャッター一商店街を生み出し、地域を疲弊させてしまうのではないかとと思われる場面も多い。



オペラコンクール事務局（アクトシティ内：2011、11、12～11、24の期間、第6回オペラコンクールが行われていた。）

撮影：2011年11月19日



同時期に行われた「はままつ映画祭」の上り旗 2011、11、19～11、27の期間開催）

撮影：2011年11月19日

日本一の「音楽のまち」は浜松だと誰もが思っている。

浜松が楽器製造では日本一の町であるということは、日本中の人が知っている。浜松市はものづくりの「楽器のまち」だけではなく、文化芸術面でのソフトの充実を図るため、1981年（昭和56年）から「音楽のまちづくり」を掲げている。これは第2次総合計画に位置づけられたものである。

特に、1991年度から3年ごとに開催している浜松国際ピアノコンクールは世界的に活躍する若手のピアニストを輩出するものとして実施されており、1996年に始まった静岡国際オペラコンクールとともに、国際音楽コンクール世界連盟に加入している権威あるコンクールになっている。

浜松市は、2009年3月に「浜松文化振興ビジョン」を新たに制定した。そこでは、「文化は私たちが生きていくうえで社会になくてはならないものであり、すべての人々がよりよく生きるためには、文化的な活動を行い享受する権利を有している」と謳い、生活の質の向上、人々のプライド、地域の愛着などを掲げている。

人と人をつなぐ文化、都市の魅力・活力となる文化、生活の潤いとなる文化を掲げ、都市のイメージとして「市民が主体となって文化を創造し発展させていく都市」「文化の持続的な循環が行われる都市」を目指している。

ヤマハ、カワイ、ローランドなどの本社がある強みを生かし、都市ブランド形成のために、楽器や音楽産業を中心に置き、高度の技術力を背景に、四半世紀以上にわたり、「音楽のまち」を目指してきている。クラシックだけではなく、ジャズや吹奏楽、合唱などの活動も盛んだ。浜松交響楽団や浜松シティオペラなど音楽文化を担う団体も数多い。音楽に対する市民の気持ちや心意気なども醸成されているように思う。

浜松市は、今年、ユネスコの創造都市ネットワーク・音楽分野の申請をした。文化庁によると、文学、映画、音楽、クラフト&フォークアート、デザイン、メディアアート、食文化の7分野において、都市間でパートナーシップを結び、相互に経験や知識の共有を図り、またその国際的なネットワークを活用して国内国際市場における文化的産物の普及を促進し、文化産業の強化による都市の活性化及び文化多様性への理解増進を図る目的で2004年に設立されたものである。2011年11月現在、世界29の都市が加盟しており、日本では、金沢市（クラフト&フォークアート）、神戸市（デザイン）、名古屋市（デザイン）が加盟している。音楽の分野で浜松が加盟すると日本では初めてとなる。そのほか、新潟市や鶴岡市でも食文化の分野で加盟の動きがある。

様々な都市との連携や交流は大切であり、特にアジアとの文化交流を通じた動きを活発にさせて、市民が交流するということは、これからの日本を考える上でも重要なことになっている。しかし、ユネスコの創造都市ネットワーク加盟ということは、

市民にとってはあまりよくわからない。創造都市という概念がまだ市民に浸透していないのではないかと思う。これが世界遺産登録ならば、市民にとってはわかりやすいものになっているが、ネットワーク加盟で何か新しいことが起きるのだろうか。残念ながら未知だ。

浜松市は市町村合併により、日本でも岐阜県高山市（2177.67k m²）に次いで2番目に大きな面積（1511.17k m²）を抱える市になった。そのため、地域性が希薄になる可能性がある。音楽だけではなく、地域毎の歴史や伝統をいかに守り育てていくかが課題だろう。浜松には、静岡文化芸術大学があり、文化政策学部ではアートマネジメントなどの分野の人材を育成する科目もあり、若者がそこで育っていく構図もできている。また、多くの市民が文化芸術を楽しむ土壌はできている。音楽を中心として、地域に根ざした伝統文化など、歴史や風土を大切にしたまちづくりが進んでいくことを願っている。

3) 「4 核」の商店街・音楽都市」一郡山市



開成山公園にある安積疏水事業に尽力した中條政恒（左）、大久保利通（中）ファン・ドールン（右）の像（作：三坂秋一郎）
撮影：2015 年 6 月 28 日



1874 年に安積開拓の核となる「福島県開拓掛」が置かれた「開成館」
撮影：2015 年 6 月 28 日

福島市は県と同じ名前なので全国的には知られているが、福島県をよく知る人は、福島市よりも郡山市の方が産業、商業の中心地だと思っている。福島県は、北海道、岩手県に次いで日本第 3 位の面積を持つが、会津、中通り、浜通りと東西に分かれて街道が発達したため、気候の違いもあり、三つ地方が固有の文化を蓄積してきた。今回は郡山市を取材し、中心市街地のあり方を考える。

安積疏水（あさかすい）事業が郡山の発展を促した

大和朝廷時代には安積国があり、郡山には針生古墳など 100 以上の古墳が見つまっている。平安時代には福島と同様に東山道の駅があり、奥州藤原氏の勢力下で、信夫郡司（しのぶぐんじ）の佐藤氏が支配してきた。中世には郡山を中心とした大名はなく、蒲生氏などに支配され、関ヶ原の戦いの後は二本松藩に組み入れられている。奥州街道の宿場町として 1800 年代初期に発達したが、郡山が大きく発展したのは、明治時代に「安積疏水事業」が政府により進められたことからだ。

当時の安積地方（郡山市）は水源が乏しく不毛の地と言われた原野だった。1873 年（明治 6 年）に福島県の勸めで二本松藩士が入植し開成社を設立、開墾を進め、数年で約 100 h a の開墾を実現させた。この開墾事業を廃藩置県で行きどころを失った士族の救済事業として旧久留米藩士などを入植させるため、約 25 k m 西の猪苗代湖から郡山まで疏水事業を進めることとなった。国は 78 年にお雇い外国人のオランダ人技師ファン・ドールンを現地に派遣し、猪苗代湖から安積の原野周辺の調査を行い、翌年、国直轄の農業水利事業の第一号として事業が着工された。水利調整のため、猪苗代湖には十六橋水門や山潟水門が作られ、延べ 85 万人の労働力と、現在の価格で総工費約 400 億円により分水路を含め約 130 k m の水路工事を 3 年という短期間で完成させ、周辺はコメの産地として発展していった。

その後、水路の落差を活用し、沼上、竹ノ内、丸守などの発電所を設置し、電力供給を進めたため、紡績会社の進出が相次ぎ、商業も盛んとなり、急速に発展していった。安積疏水の完成なくして郡山の発展はなかったと言える。

工場進出などで人口も増え、1924 年に小原田村を合併し、人口 4 万人となり市制に移行し「郡山市」が誕生している。34 年には郡山駅前で操業していた東洋曹達（ソーダ）株式会社を保土谷曹達株式会社（現保土谷化学工業）が吸収合併し、電解技術による苛性ソーダ、塩素などの無機工業薬品の製造を始めている。40 年代初期には海軍航空隊基地ができ、中島飛行機製造工場やその関連工場などの軍需産業が進出してきたこともあり、「軍都郡山」と言われるようになった。そのため米軍の標

仲原正治

の

まちある記

右：市内中心部の安積疏水の
経路図
撮影：2015 年 6 月 28 日



開成館敷地に移築された「安
積開拓入植者住宅・旧小山家
（松山藩）
撮影：2015 年 6 月 28 日



疏水を利用し人工の滝を作り、製糸業の動力源とした
「麓山（はやま）の飛瀑」を
1991 年に復元「麓山の滝」
撮影：2015 年 6 月 28 日



磐梯熱海温泉にある 1921 年
に作られた丸守発電所（当時
は大峯発電所という名称。
1942 年に丸守発電所に改称）
写真：小池利佳
撮影：2015 年 6 月 29 日

左：郡山駅西口にある郡山市
広域案内図—東西南北が普
通の地図とは逆になってい
るので注意。
撮影：2015 年 6 月 28 日

右：郡山周辺の道路地図
撮影：2015 年 6 月 29 日

的にされ、戦争末期の 45 年には 4 回の空爆で多くの犠牲者を出し、市街地のほと
んどを焼かれ、壊滅に近い打撃を受けた。



交通網の発達と産業振興

鉄道は 1887 年に東北本線の上野—郡山間が開通、98 年に岩越鉄道（現磐越西線）の郡山—中山宿間が開通（郡山—新津間 1914 年全線開通）、1914 年（大正 3 年）に平郡鉄道（現磐越東線）郡山—三春間が開通（郡山—平（現いわき）間 1917 年全線開通）、34 年に水郡線が全線開通するなど、福島県中央部に位置する都市として、交通の要所となっていた。82 年 6 月に東北新幹線の大宮—盛岡間が開通し郡山駅が開設され、85 年に上野まで延伸（東京駅延伸は 91 年）している。

東北自動車道は 73 年に郡山—白河間が開通し、87 年には川口—青森インター間が全線開通している。磐越自動車道は 90 年に郡山—磐梯熱海間が開通、97 年にはいわき—新潟間の全線が開通し、郡山は東北自動車道との分岐点となった。1993 年にはリムジンバスで 45 分の距離にある隣接の玉川村に福島空港が開港している。



まちの基盤整備については、戦後の 47 年に中心市街地の駅周辺 3 地区で 115.3 h a の規模で戦災復興土地区画整理事業を行い、その後も区画整理事業をまちづくりの



筆者の拠点がある磐越東線
「小川郷駅」は15年7月に
100周年を迎えた。
撮影：2015年5月24日



阿武隈川沿いにある郡山中
央工業団地
撮影：2015年6月29日

右：郡山市の工業団地の位置
図
(郡山市ホームページより)



1986年に郡山地域テクノポリスの指定があり、ベンチャー精神あふれる企業が数多く活躍できるように「テクノポリスものづくりインキュベーションセンター」なども整備され、産業誘致を積極的に進めてきた。85年には人口30万人を超え、97年に福祉・保健衛生・都市計画に関する事務などを独自に行うことができる中核市となっている。

2011年の東日本大震災後、福島県は人口200万人を切り、現在約192万人となっているが、郡山市も平成22年(2010年)の国勢調査時には33万8712人の人口を抱えていたが、約2年間で1万1000人ほどの人口減があった。しかし、市内への情報



1920年に建築された国鉄郡山工場。近くの和菓子店で聞くと、コーラスや外国人ミュージシャンの公演を見に行ったことがあると話していた。

撮影：2015年6月29日



1984年に竣工した郡山市市民文化センター（以前の市民会館は取り壊されている）

撮影：2015年6月29日



1974年に野外ロックコンサート「ワンステップフェスティバル」が開催された開成山公園

撮影：2015年6月29日

関連企業や工場の増設などにより雇用が増えたことで、13年以降は少しずつ盛り返し、13年9月にいわき市を抜き、人口が県内トップとなり、15年7月1日現在で32万9489人となっている。ちなみに県庁所在地の福島市は28万人余で県内3位の人口だ。

「楽都郡山」ー東北のシカゴから東北のウイーンへ

戦後の郡山は戦災により荒廃していた。特に昭和20-30年代には暴力団が街を闊歩し、何回かの抗争もあり治安は最悪で「東北のシカゴ」とまで言われていた。

一方、戦災復興を目指す中で、1950年代に入ると美術・演劇・音楽などの団体ができはじめ、「素人のど自慢大会」が盛んになり、市民が音楽を楽しむ機会が多くなっていった。そうした中で、本格的なオーケストラ演奏を聞きたいという市民の思いが実り、1954年に「国鉄郡山工場大食堂」でNHK交響楽団の演奏会が開催された。これを契機に、市民が気軽に楽しめる合唱や器楽演奏などが盛んになり、58年に東北一の設備を誇る市民会館が誕生している。64年からは「10万人コーラス運動」が始まり、市内各所で合唱活動が盛んとなり、翌年「20万人コーラス市内パレード」が開催され、「東北のシカゴから東北のウイーンへ」と全国的にも知られ始めてきた。72年、音楽で暴力を追放する市民活動をモデルにした映画「百万人の大合唱」（監督：須川栄三、音楽：山本直純）が封切られている。

74年に市民の手により開成山公園で野外ロックコンサート「ワンステップフェスティバル」が開催され、オノ・ヨーコ、キャロルなどそうそうたるメンバーが出演するなど、幅広い音楽活動が展開されてきた。

現在は、「“音楽都市こおりやま”市民音楽祭」が年間を通して開催されているが、営利目的でなければ誰でもが参加でき、参加条件を満たせば郡山市、郡山市教育委員会の後援事業としてイベントカレンダーやウェブサイトで紹介される仕組みだ。2008年3月、郡山市議会は「音楽都市」宣言をし、「楽都郡山」を市のキャッチコピーとした。なお、郡山市が「暴力追放都市宣言」を行ったのは1988年になってからだ。

『郡山市音楽都市宣言（平成20年3月24日議決）』

「美しいメロディー 心おどるリズム 音楽がまちにあふれ 人の輪が広がり心をつなぐ

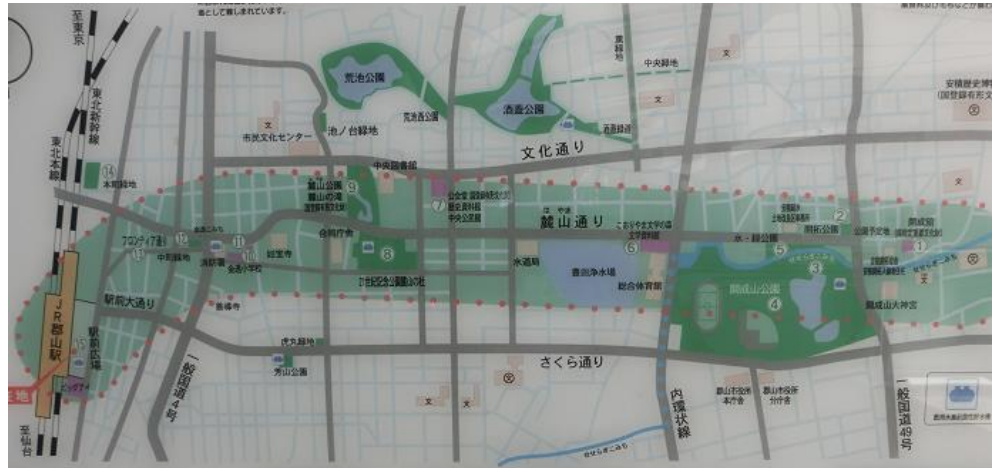
私たちは音楽を愛し 人と人が織りなすハーモニーを奏で 明るい笑顔が輝く 魅力あるまち“こおりやまを創ります” 「明日につなごうこころのハーモニー」 郡山市は、ここに「音楽都市」を宣言します。」

仲原正治

の

まちある記

右：郡山駅から開成山公園に至る経路は郡山の緑の軸線となっている
撮影：2015年6月28日



明治5年当時の福島県などの位置図
撮影：2015年6月29日



福島県庁本庁舎と西分庁舎
撮影：2015年6月28日



大震災で東分庁舎が使用不能となったため、東分庁舎代替庁舎の工事を進めている。
撮影：2015年6月28日

行政の中心地「福島市」からの県庁移転運動

江戸時代の福島市辺りは会津藩、二本松藩、棚倉藩、三春藩、磐城平藩などの小・中藩に囲まれていた。福島藩は1700年代に3万石という少ない石高で板倉家が統治をはじめ、幕末まで続いた。会津藩の若松城籠城で有名な戊辰戦争（1868－69）に際して、仙台藩をはじめとする奥州・出羽の25藩により奥羽越列藩同盟（おううえつれっぱんどうめい）が結成され新政府軍と戦ったが敗戦し、明治維新を迎えている。

1869年（明治2年）太政官令により、現在の会津から中通り地方は岩代の国に、浜通り地方は磐城国となったが、同年、岩代の国の伊達郡と福島のある信夫郡（しのぶぐん）を統括するために福島県が設置された。

71年（明治4年）の廃藩置県により、会津は若松県、中通りは二本松県（すぐに福島県に名称変更）、磐城国は磐前県（いわさきけん）の3県に分割統合され、76年（明治9年）になり3県が福島県に統合され、福島市が県庁所在地となった。

1882年に赴任した三島通庸（みちつね）（82－84年福島県令）は道路建設などの公共事業を積極的に進める一方で自由民権運動を弾圧し、「福島事件」を起こした人物だが、県庁移転にも深く関わっている。

福島市が県北にあり会津や磐城から遠いこと、郡山市が県央にあり、交通の便が良いことや産業や商業の集積などがあるため、1880年代始めに県庁の郡山移転運動が盛んになった。県議会では85年3月に郡山市への移設決議が賛成37、反対16で可決された。しかし、推進容認派の三島県令（83－85年栃木県令、福島県令と兼任した時期がある）が栃木県へ転出したこともあり、不明確な経過で却下されている。三島通庸は栃木県令時代の84年に栃木県庁を栃木市から宇都宮市へ移転させているが、県庁移転はこれ以外に事例はない。栃木では道路整備など公共事業を暴力的に進める手法に対して、当時の県会議員田中正造との壮絶な戦いがあり、85年に県



ビッグパレットふくしま(福島県産業交流館・1998年10月オープン)は多目的展示ホール、コンベンションホールなどを備えた延床面積約2万3000㎡の施設。設計は北川原温。
撮影：2015年6月29日



「ビッグパレットふくしま」の隣接地にある「郡山南1丁目応急仮設住宅」には、今も原発被害の大きい富岡町などの住民が入居している。
撮影：2015年6月29日



郡山市内では様々な場所で、放射能値が測定されている。写真は開成山公園内の測定器。なお、郡山市内の2015年3月現在の放射線量平均値は0.17μSv/hと発表されている
撮影：2015年6月28日

令を解任され警視總監となっている。

福島県庁移転運動は大正時代以降2回あり、大正15年には大正天皇のご崩御、昭和10年頃は戦時体制に向かう時期で、うまく進まなかった。

しかし、ごく最近にまた県庁の郡山移転が再燃した。2010年に民間主導で「福島県庁を郡山へ移転推進する会」が結成され、県内の三春町、小野町、矢祭町などの議会が県庁移転要望書等の可決決議を行っている。また、東日本大震災被害により1954年に建設された県庁本庁舎の老朽化による建て替え問題も再燃し、郡山への県庁移転を望む声があがっている。

浜通り地方のいわき市に拠点がある筆者には福島市も郡山市もあまりなじみが深い場所ではない。郡山市は県中央部にあり、鉄道、高速道路なども交差する交通の要所となっており、福島市よりも便利なのは確かだ。しかし、今後の自治体のあり方を考えると、自立した自治体形成のために、「国・県・市町村」という今までの国主導の制度がはたして良いのか、地方自治の根源を問うなかで、中心地(県庁)を考えるべきだと思っている。

福島第一原発崩壊による放射能被害

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、福島県内では、当初15万人余が自宅から避難をしている。2015年5月時点でも県内で約6万7千人、県外で約4万5千人、合わせると11万2000人余の人が避難生活を強いられている。

郡山市は原発崩壊後の3月には4.0μSv/h(マイクロシーベルト)を超える地域もあり、5,000人を超える市民が市外に自主的避難をした。郡山市の「ビッグパレットふくしま」には約2500人が避難し、同年8月31日までの間、避難所として利用された。

小中学校では、11年5月から12年3月まで屋外活動時間を1日3時間以内に制限した。郡山市は校庭の表土について、地表から1センチの高さの放射線量が小、中学校で毎時3.8μSv/h以上、保育所で同3.0μSv/h以上の場合は除去するという独自の基準を設定し、小学校9校、中学校6校、保育所13カ所で除去作業を行った。半年後の11年8月には市内の放射線量平均値は0.64μSv/hとなり少し落ち着いたが、この頃まで、他都市へ避難する人が多かった。

一方、直接的被害が落ち着いた13年9月時点で、放射能被害が大きい富岡町、浪江町、川内村、大熊町などから約9,200人が郡山市内の仮設住宅や借り上げ住宅で生活していた。

県では、原発事故当時に18歳以下の子供について、放射能の影響による子供の甲状腺がん検診を実施し、約3年間(2011年度～13年度)に検査を受けた約22万6000人のうち、甲状腺がんやその疑いがあると診断された児童は59人と発表している。

仲原正治

の

まちある記

被爆がない場合の3倍以上となっている現実や、チェルノブイリ原発時には被爆後4-5年に著しく顕在化したという事実を考えると、まだこうした患者が多くなることが予想される。

郡山駅前の中心市街地「4つの核」

郡山駅の東側隣接地に保土谷化学工業郡山工場(旧東洋曹達株式会社)があったため、駅周辺は空爆でほとんど壊滅している。現在も保土谷化学の工場があるが、その広大な敷地が、将来的にどのように活用されるかが、郡山市の市街地の形成の鍵を握っていると思われる。

西口地域は戦災復興区画整理事業により、町を新しく形成した地域だ。駅(鉄道)から国道4号線までの区域が中心市街地で、郡山市は駅北核、大町核、駅南核、中町核の4つの核を中心にまちづくりを進めている。



郡山東口駅前の保土谷化学工場の広大な敷地と工場
撮影：2015年6月29日



地上24階133mを誇るビッグアイと郡山駅前広場
撮影：2015年6月29日

右：郡山駅前の重点整備地区
(○で囲んだ部分が4核、写真右側が北)
撮影：2015年6月28日



「アティ(A-Ti)郡山」のキーテナントはヨドバシカメラ
撮影：2015年6月28日



大町核の中心の大町商店街は日曜日の午後でも人出は少なかった。
撮影：2015年6月28日



駅前には戦前からあった「うすい百貨店」をはじめ、1970年代から80年代に丸光(仙台資本)、西武、ダイエー、丸井などの大型店が進出し、激しい競争を繰り広げてきた。しかし、それらが郊外型スーパーの台頭により次々に撤退し、駅前の商業地は寂れていった。

駅北核には第一種市街地再開発事業により「ビッグアイ」が誕生したが、完成までには紆余曲折があった。1983年には大型商業施設をメインとした開発を進める計画だったが、市長の交代でとん挫し、ようやく96年に商業施設と公共施設を入居さ



大町土地区画整理事業が行われている地区。旧ダイエー（トポス）のあるビルも区域内だ。

撮影：2015年6月29日



大町土地区画整理事業施行区域図（約2.2ha）

撮影：2015年6月28日



「うすい百貨店」の周辺も日曜日の午後にも拘わらず人出は少なかった。

撮影：2015年6月28日



うすい百貨店と寿泉堂総合病院の前面道路の舗装は波打っていて、つまずきそうになった。

撮影：2015年6月28日

せる計画に変更し、2001年に地上24階地下1階の超高層ビル「ビッグアイ」を完成させている。建物には、商業施設「モルティ（MOLTI）」や市民プラザ、プラネタリウムを備えた「郡山市ふれあい科学館スペースパーク」、定時制・通信制の福島県立郡山萌世（ほうせい）高等学校などの公共施設が入居している。経済の停滞期で保留床の売却が思うように進まず、郡山市が事業費を補填するなどしている。

大町核は、撤退した旧ダイエー（トポス）がある地域で、大町土地区画整理事業（約2.2ha）が2005年12月に事業計画決定され、空き店舗の再生と日の出通りを幅22mに拡幅する事業を進めている。大町商店街では「笑・SHOW・商」というイベントを毎月開催するとともに、「おおまちネット」を開設し、インターネットショッピングモール（通販）も行っている。

駅南核の「アティ（ATi）郡山」は、75年に西友郡山店（郡山西武）としてオープンした建物だが、西武が2000年に撤退、その半年後に若者たちをターゲットにしたファッションビルとしてオープンしている。10年11月にヨドバシカメラを誘致して営業を行っていたが、東日本大震災でほぼ全館休業し、11年9月に営業を再開している。

中町核には「うすい百貨店」があったが、行政主導により「第2うすい」のあった土地を中心に中町第一地区第一種再開発事業を進め、売り場面積約3万1460㎡の東北最大規模の「うすい百貨店」を1999年に誕生させている。しかし、うすい百貨店も2003年には産業再生機構の支援を受け、再生計画が進められ、現在は三越伊勢丹ホールディングスの持分法適用会社となっている。

郡山駅前の中心市街地を歩く

4核によるまちづくりの現地を見たが、3箇所は大型商業施設が中心で、大町核だけが、旧来の商店街となっている。

ビッグアイは市が主導の開発のため公共施設が多く、低層階には商業施設、駐車場、駐輪場も整備されているが、商業施設の買い物客はあまり多くないと感じた。ヨドバシカメラの入る南核「アティ（ATi）郡山」は建物一つが核となっているだけで、周辺には商業施設がなく、他への波及が少ない。

「うすい百貨店」には、仙台や東京にあるルイヴィトンなどのトップブランドの店が入り、前面の「なかまち夢通り」は御影石舗装されるなど立派に整備されているが、日曜日の午後の人出は少なく、あまり活性化しているようには見えない。それよりも前面道路がピンコロ舗装で波を打っていて、自動車も歩行者も通りにくいことが気になった。うすい百貨店の隣に、超高層のマンション「シティタワー郡山」



マンションと寿泉堂総合病院が一体となった超高層複合施設
撮影：2015年6月28日



駅前大通りには、薄皮まんじゅうで有名な「柏屋本店」があるが、空き店舗が目立つ。
撮影：2015年6月28日



駅前アーケード商店街は日曜日に開いている店は少なかった。
撮影：2015年6月28日



郡山駅から1 km足らずの場所にある「イオンタウン郡山」(売り場面積約2万8000㎡)には広大な駐車場があり、週末は賑わっている。
撮影：2015年6月29日

があるが、低層階（1-11階）に「寿泉堂総合病院」が入っており、医療と住宅が同居している。

駅前大通りにも空き店舗が目立つ。駅前アーケード商店街は、飲食店が中心だが、日曜日はほとんど閉まっている。全体として郊外の大型商業施設に対抗ができるような感じではなく、施設も劣化を始めている。

大町地区の区画整理事業は現在の自動車交通量があまり多くなく、道路の拡張を行う理由がわからない。区画整理事業を進めても、駅前アーケード街や周辺の商店の状況からみて、地域の活性化が図れるとは思えない。

購買客は駅前の中心市街地の4核ではなく、郡山駅東口から1 km足らずの場所に広大な駐車場を抱える「イオンタウン郡山」などの郊外型の商業施設に人が流れているようだ。

中心市街地に「たまり場」を

全国の中小都市の中心市街地はバブル経済期の1980年代ころから急速に疲弊していった。衰退の大きな理由は都市の構造の変化とモータリゼーションの発達だ。特に地方ではクルマ中心の生活になり、中心商店街に与えた影響は大きい。また、冷凍庫の普及や電子レンジの発達は、毎日買い物に行かなくても済むようにしている。今は、インターネット通販も発達し、店に行かなくても購入することができる。

中心市街地には市役所などの公共施設や文化施設が近くにあり、業務機能や娯楽、飲食店が集まり、情報も人材も集まっていた。バブル経済期には首都圏だけでなく地方の中心地の地価も高騰し、地価が安くて広い土地が得られる郊外部に病院や公共施設、大型商業施設が移転していった。そして、コンビニがいたるところにでき、商店街に行かなくても買い物ができるようになった。

国は1998年にまちづくりの観点から大規模店舗の立地規制などを可能にする「改正都市計画法」、1,000㎡を超える店舗を対象として、周辺住民への説明会の開催義務や交通渋滞、騒音、廃棄物等に関する事項を定め、大型店と地域社会との融和を図る「大規模小売店舗立地法」、空洞化の進行する中心市街地の活性化を図る「中心市街地活性化法」のいわゆる「まちづくり三法」を成立させた。しかし、今日まで様々な対策を進めたが中心市街地では居住人口の減少は止まらず、郊外部への公共公益施設の移転や大型商業施設の立地が主因で衰退が進んでいるのが現状だ。

こうした都市構造の変化に対応するためには何が必要なのか、国や自治体も有効な手立ては見えていない。その原因のひとつは消費者の視点からの問題提起が行われなかったからではないだろうか。消費者にとっては、安くて良いものが買えることができれば場所は問わないので、商店街が衰退しようが関係はない。

中心商店街をなぜ活性化させなければならないのか、もう一度考える必要がある。

まず、商店街は出会いと交流の場だったということだ。買い物という行為の中で、店の人との会話や地域の人との交流があった。それは大型商業施設やコンビニなどのマニュアルどおりの接待とは違った「人と人」の触れ合いだ。2 番目には、昔からの歴史や伝統、文化の中心地であり、祭りなどのハレの場としての役割があり、老若男女が一緒に集う場があった。そして、中心商店街の周辺には、病院、公共施設、住宅などが集積し、クルマを必要としないコンパクトさがあり、高齢者を含め誰もが安心して暮らせる要素があった。

こうした要素があるからこそ、高齢化社会に対応するためにも中心商店街を活性化して、失われたコミュニティの復活や町の個性の復活を進め、安全で安心した暮らしを可能にすることが必要なのではないだろうか。

個店は「商品売る」ことでは大型商業施設にはかなわない。とすると、郊外店にはない、コトをおこして「コミュニティ」「人と人との交流」「楽しい時間」などが用意されるような工夫が必要だ。その商店街へ行くと楽しい、仲間がいる、相手をしてくれる人がいる。商売している人たちが自分の店のノウハウを提供している。そんな機能を復活させることで、新しい「商店街」を目指すことが重要ではないだろうか。

そのためには個々の商店の魅力を高めることも必要だが、「売る」という発想から「集まる」という発想に変えるべきではないだろうか。商店街に人が集う「たまり場」ができ、そのたまり場を取り巻いて商売が行われるという姿にすべきではないだろうか。

そして、自分たちの町の誇りや伝統を感じるような工夫と商売をする後継者を育てることが求められる。ここで言う後継者とは、自分の子供である必要はない。息子や娘が店を継ぐという時代は終わっている。儲けが出ない商売を続ける人はいないし、それを継がせたい親も少ない。何かを実現したいという若者であれば誰でも良い。閉めている店ならば、若者に安価（無料）で貸し付け、若者を呼び込むことで、シャッターの開いた商店を生む。まず、店で誰かが「何か」を始めることが大切だ。現在、政府は地方創生という名目で消費喚起のためにプレミアム付き商品券の発行を促している。横浜市では、1 万円で 1 万 2000 円分の商品券を発行するが、1000 円分以外は百貨店やスーパーでも使える。99 年に発行した地域振興券が一過性のバラマキ行政で、良い効果を生み出さなかったように、これで中小の商店が活性化するとは思えない。

こんなことに多額の税金を使うのではなく、地方の生活のあり方を考え、古い店を若者が活用する時には、行政がコンバージョンを支援して使いやすくするなど、地域に必要なコンパクトな基盤整備を進めるべきではないか。中心市街地の復活を進める具体的な施策を実施していかない限り地方の衰退は止められない。

4) 「浦和と大宮・個性を活かせ」—さいたま市

浦和市、大宮市、与野市が 2001 年に合併して「さいたま市」が誕生した。しかし合併後も、埼玉方面に出かけるときに、さいたま市とは言わずに、大宮や浦和、与野に行ってくるという言い方をしてしまう。「だ・さいたま」とまで言われている現状は、あまりぱっとしない場所なのではと世間では思われている。今回は、さいたま市という都市名がなぜなじみ難いのかを含め、さいたま市の魅力を発掘してみたい。



浦和宿本陣跡のある仲町公園には明治天皇の行在所の石碑が建てられている。
撮影：2015 年 5 月 4 日



県知事公舎前にある 1906 年（明治 39 年）開校した県立浦和第一尋常中学校の記念碑（昭和時代に領家に移転し、現在の浦和高校となる）
撮影：2015 年 5 月 4 日



昭和 39 年当時の中山道、旧浦和宿辺りは賑わっていた。
撮影：2015 年 5 月 4 日

政治のまち 浦和

江戸時代、浦和は中山道の日本橋から 3 番目の宿場町で、あまり大きくない宿場だった。浦和が大きくなり始めたのは、明治以降だ。明治に入り浦和周辺は武蔵県になり、すぐに大宮県と名前を変え、1869 年（明治 2 年）に浦和県となって、県庁が鹿島台に置かれた。71 年の廃藩置県後、浦和県は岩槻県、忍県、小菅県とともに埼玉県に統合された。当初、岩槻を県庁と定めたが、施設がなく浦和の施設をそのまま県庁として利用し、裁判所もでき県都としての機能が大きくなっていった。73 年に師範学校、76 年に医学校、その後も県立浦和第一尋常中学校、官立浦和高等学校などの教育施設が次々に設置され、全国から優れた学生が集まるようになり、文教都市として名高くなっていった。

1883 年に私鉄の日本鉄道により上野―熊谷間の鉄道が開業し、浦和駅が誕生している。当初の駅は、上野、王子、浦和、上尾、鴻巣、熊谷で大宮駅は作られていない。1923 年の関東大震災時には、東京 7 万人余、横浜 3 万 3000 余名の死者に比べ、埼玉県では建物の崩壊等で 315 名と、東京や神奈川と比べると非常に少ない犠牲者だった。32 年には現在の京浜東北線も大宮まで延伸・開通し、文教都市であること、震災被害が少なかったこともあり、東京や横浜からの移住者が増加、34 年に市制を施行し、町が発展していった。

高度経済成長期には、南浦和や北浦和、領家などで団地開発が進み、東京への通勤者を中心に人口が増加し、東京のベッドタウンとしての役割が濃くなっていった。県庁所在地としての優位性はあったが、東北本線などの特急や新幹線停車駅が大宮駅、湘南新宿ラインも 2013 年までは停車しないなど、ターミナル機能が大宮に集中し、商業的には大宮に少しずつ後れを取っていた。

2001 年 5 月 1 日に浦和市、大宮市、与野市が合併し、さいたま市が誕生、03 年 4

仲原正治

の

まちある記



埼玉県庁付近には、裁判所などもあり、ゆったりとした空間となっている。
撮影：2015年5月4日



氷川神社境内
撮影：2015年1月27日



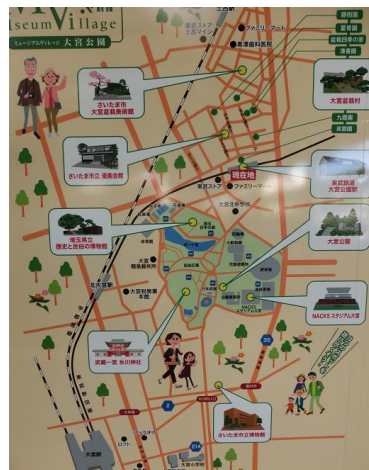
写真左側にあるJR東日本大宮総合車両センターは大宮駅から鉄道博物館へ行く途中にある。
撮影：2015年5月4日

左：大宮公園付近の公共施設等案内図
撮影：2015年1月27日
右：鉄道路線図を見ると大宮駅が一大ターミナルになっていることがわかる。
撮影：2015年5月4日

月1日に政令指定都市になり、05年に岩槻市を編入している。現在は10の行政区で、15年4月1日現在の人口は126万3455人、65歳以上が27万4673人（高齢化率21.74%）だ。05年の国勢調査時に117万6314人だったので、10年間で9万人近く人口が増えている。浦和市が県庁所在地だったため、浦和区には埼玉県庁、さいたま市役所、県立近代美術館、さいたま地方裁判所などの官庁や公共施設が多い。

鉄道と共に発達した大宮

大宮には創建から2千年以上の武蔵一宮氷川神社（関東に約200社ある氷川神社の本宮）があり、大宮の地名の由来も、氷川神社を「大いなる宮居」として崇めたことからきている。古くは門前町として栄え、江戸時代には中山道の宿場町として栄えた。明治以降は街道の役割が少なくなり、鉄道駅が浦和に設けられたため、町は衰退しはじめた。後に大宮町長となった白井助七らを中心に町の有志が土地を提供して駅を誘致し、1885年（明治18年）に大宮駅が誕生している。94年には日本鉄道の大宮工場（現JR大宮総合車両センター）が操業を開始し、周辺に日本鉄道の材料工場や操作場が設けられ、高崎線、東北本線の分岐駅となり、次第に「鉄道の町」になっていった。昭和に入ると総武鉄道（現東武野田線）や現在の京浜東北線、川越線なども開通し、ターミナル駅へと発展していった。



1982年6月に東北新幹線の起点駅として大宮―盛岡間が開通、同年11月には上越新幹線も大宮―新潟間が開通し、翌年には埼玉都市交通伊奈線が開業、さらに85年には新幹線が上野まで延伸（東京駅まで延伸は91年）、同年埼京線も開通した。埼京線は新幹線開通の見返りとして作られた路線だ。東北・上越新幹線は1971年に工事認可が下り、当初は大宮駅の手前までは地下化する計画だった。しかし、73年に軟弱地盤のため地下化は困難で高架方式が提案された。当時は、東京都の美濃部、神奈川県の大井、埼玉県の大井と首都圏は革新自治体が強く、公害問題が政

仲原正治

の

まちある記



鈴木エドワード設計の「さいたま新都心駅」
撮影：2015年5月4日



国の合同庁舎には、関東経済産業局、関東地方整備局、関東農政局など国の出先機関が集まっている。
撮影：2015年5月4日

左：さいたま新都心駅周辺案内図
撮影：2015年5月4日

右：合同庁舎周辺の配置図
撮影：2015年5月4日

治の焦点となっており、騒音・振動による生活への影響が問題となり反対運動が激化した。これに対して、通勤新線の新設（埼京線）と騒音規制（速度制限）を行うことを条件に地元の合意を得て、建設が進められた。東京一大宮間が他地区に比べゆっくり走るのは、騒音対策で在来線並の时速110kmに抑えているからだ。

現在、大宮駅にはJR線の東北（秋田・山形）新幹線、上越（北陸）新幹線、東北本線（宇都宮線）、高崎線、川越線、埼京線があり、在来線を利用する湘南新宿ラインも走っている。一日の乗客数はJRで約25万人、東武野田線で約13万4千人、伊奈線約4万人と関東北部の一大ターミナル駅となっている。

未来都市 さいたま新都心

旧国鉄大宮操作場が廃止となるため、1984年に跡地の有効活用を政府は閣議決定した。86年には旧浦和市・大宮市が業務核都市に指定されている。業務核都市については国土交通省ホームページに、「東京圏における住宅問題、職住遠隔化等の大都市問題の解決を図るため、東京都区部以外の地域で相当程度広範囲の地域の中心となるべき都市（業務核都市）を業務機能をはじめとした諸機能の集積の核として重点的に育成整備し、東京都区部への一極依存型構造をバランスのとれた地域構造に改善していくことが必要です。このため「首都圏基本計画（第4次）（昭和61年6月決定）」において、業務核都市の整備の考え方が示され、昭和63年に制定された多極分散型国土形成促進法において業務核都市制度が定められ、これらに基づく支援措置等により、業務核都市の育成・整備が進められてきました。」と記載されている。



当時は地価の高騰が激しく、東京は地震・災害に脆弱なため、首都機能移転の議論が活発になされ、1990年に「国会等の移転に関する決議」を衆参両院で議決された。92年には「国会等の移転に関する法律」も成立し、12月には国会等移転審議会が、



さいたまスーパーアリーナ
撮影：2015 年 1 月 27 日



ゴールデンウィーク中、イベントで賑わうスーパーアリーナ前広場
撮影：2015 年 5 月 4 日



東口にある民間の商業施設
「コクーン新都心」
撮影：2015 年 5 月 4 日

北東地域の「栃木・福島」、東海の「岐阜・愛知」を移転先候補地として選定した。しかし、その後バブル経済の崩壊で地価が下がり、99年に石原慎太郎が「首都移転絶対反対」を公約に都知事に当選したため、移転論は立ち消えになった。また、移転対象の首相官邸や総務省、外務省などの省庁ビルが新しく建て替えられ、2003年には「国会等の移転に関する特別委員会」（衆参両院）で「移転の必要性は認めただが、候補地が絞れない」との中間報告をだし、その後国会での議論は行われず凍結された。現在、「国会等の移転に関する法律」は機能していないが廃止されてもいない。

そうした時期と重なるさいたま新都心計画は、大宮操場跡地と民間開発用地など約47.4haの規模で、首都高速「埼玉・大宮線」やJR「さいたま新都心駅」を含めた業務地区として整備されている。計画延床面積は約180万㎡、就業人口約5万7000人で、新都心駅の西側には国の合同庁舎3棟のほか、ホテル、郵便局、「さいたまスーパーアリーナ」などがあり、東側には、イトーヨーカドーや片倉工業が運営する大型商業施設「コクーン新都心」がある。

「さいたまスーパーアリーナ」は「さいたま新都心」の街開きが行われた2000年にオープンしている。イベント、スポーツ、コンサート、見本市など様々な用途に対応できる全天候型の多目的ホールで、延床面積約13万㎡、客席・ステージ、床などが可動し、スタジアムや二つのアリーナなどに変更でき、最大で3万6500席の収容施設となっている。施設は埼玉県所有で、設計は公開競技で「MAS・2000共同設計室（代表：日建設計）」が選ばれ、第3セクター株式会社さいたまアリーナが指定管理者に選定され管理運営している。今年11月からは横浜国際女子マラソンに代わり、開催される第一回さいたま国際マラソンの発着地点となるなど、さいたま市の中心的なスポーツ・イベント施設となっている。2000年10月9日のジョン・レノンの誕生日に「ジョン・レノン・ミュージアム」が施設内にオープンしたが、10年後に閉館となっている。

サッカー王国を支えるレッズとアルディージャ

浦和レッドダイヤモンド（レッズ）と大宮アルディージャの二つのJリーグチームがあるさいたま市。サッカーの起源をたどると、1870年代始めに横浜などの居留地を中心にイギリス人がはじめ、横浜や神戸に外国人のサッカークラブができたと言われている。日本では70年代後半に体育教員養成所の体操伝習館で教えはじめ、そこで学んだ教師が、神戸、東京、広島、浦和などの師範学校で教科として取り入れ、全国に普及していった。浦和では1908年頃に埼玉県師範学校（現埼玉大学）に赴任した細木志朗が蹴球部を設立し、生徒に教えたのが最初だ。その教え子たちが地域の学校の教師となり、子供たちにサッカーを教え、盛んになっていった。師

仲原正治

の

まちある記



浦和美園駅から徒歩15分ほどにあるさいたまスタジアム2000の周辺は、開発途中で店などは駅前にしか見当たらなかった。
撮影：2015年5月4日

左：大宮公園の案内図。大宮サッカー場は、緑あふれる大宮公園内にあり、大宮駅からは徒歩20分程度だ。
撮影：2015年1月27日

右：浦和駒場スタジアムの開設当初と現在の写真が浦和駅の工事壁に展示されている。
撮影：2015年5月4日



浦和レッズは、1950年に「中日本重工業サッカー部（後に三菱重工サッカー部、三菱自動車工業サッカー部と名前を変えた）」として設立され、銅メダルを獲得した68年のメキシコオリンピック代表の横山謙三（GK）、片山洋（FB）、森孝慈（MF）、杉山隆一（FW）を輩出する名門チームだったが、当時は浦和が本拠地ではなかった。Jリーグ発足に際して、当初は江戸川区を本拠地に考えていたが、スタジアムの収容人数等が理由で、浦和をホームタウンにした。女性チーム「浦和レッズレディース」は1998年に「浦和レイナス」として発足、2005年にレッズの下部



浦和駅西口の「浦和コルソ」と伊勢丹
撮影：2015 年 5 月 4 日



浦和駅東口の「パルコ」はさいたま市複合公共施設「コムナーレ」と同じビルにある。
撮影：2015 年 5 月 4 日



連休中だったが、浦和駅西口のなかまち商店街の賑わいはあまり感じなかった。
撮影：2015 年 5 月 4 日



大宮駅はルミネと一体となっており、西口はペデストリアンデッキで、大型商業施設と繋がっている。
撮影：2015 年 5 月 4 日

組織となり、09 年、14 年に「なでしこリーグ」で優勝している。

さいたま市に公式戦が可能なサッカー場として、レッズの本拠地で日本最大のサッカー専用スタジアム「埼玉スタジアム 2002」（63,700 席）、アルディージャの「大宮サッカー場（NACK5スタジアム大宮）」（15,600 席）、レッズレディースのホームスタジアムの「浦和駒場スタジアム」（21,500 席）の 3 か所がある。

既存商店街の衰退を食い止めろ

浦和駅周辺には、専門店街の浦和コルソと伊勢丹、PARCOがあり、大宮駅周辺にはDOMショッピングセンター、高島屋、そごう、ロフト、OPAなどの大型商業施設、駅にはルミネ 1、ルミネ 2、駅ナカには「エキュート」もあり、JR東日本の巨大な商業施設は、周辺の商店街にとっては脅威の存在だ。

さいたま新都心にはコクーン、イトーヨーカドー、南浦和駅前には丸広百貨店、武蔵浦和駅前にはミューズシティなどの大型商業施設、郊外にはステラタウン、イオン浦和美園、イオン与野などの大型のショッピングセンターがある。

一方、浦和駅前には「なかまち商店街」や「東口大通り商店街」、「高砂共栄会」などがあるが、全体として賑わいに乏しいように感じた。商店街は、駅前の大型店舗やさいたま新都心の商業施設に完全に押されてしまっている感だ。

大宮駅前には銀座通り、すずらん通り、一番街商店街など数多くの商店街があるが、ゴールデンウィークの一番街周辺はそれなりの賑わいがあったが、一ノ宮商店街に来ると、休んでいる商店も多かった。いくつかの商店街では既存の店舗の撤退などが続き、商店街の衰退が指摘されている。表玄関の駅周辺の整備には力を入れ、大型商業施設が集積し賑やかだが、反面、大規模開発で周辺の商店街が圧迫されてきた感は否めない。

さいたま市では浦和駅周辺、大宮駅周辺、さいたま新都心などの都心地区、武蔵浦和、岩槻駅周辺などの副都心のほか、駅周辺の地域生活拠点で市街地再開発事業を進めてきた。昭和から平成にかけて 18 か所で市街地再開発事業が完成し、現在、浦和駅東口駅前や武蔵浦和駅周辺など 4 か所で事業中、大宮駅周辺で 2 か所が都市計画決定されている。

こうした大規模開発に比べ地域の商店街に対する活性化の方策はあまり見えない。合併以前に浦和市、大宮市、岩槻市は「中心市街地活性化基本計画」を策定していたが、合併後のさいたま市は計画を作成していない。中心市街地が分散し計画を立てにくいのか、いくつかの地域だけを作成すると不公平感が生じるからか理由がわからないが、大型店に蹂躪されている商店街を見ると、なんらかの手立てが早急に必要だ。市は商店街の賑わい等を創出するためのイベント等のソフト事業や空き店舗活用などに対して補助を行っているが、既存の商店街を今後どのように支援し、



一番街商店街は、昼から居酒屋が開店しているためか、賑わっていた。
撮影：2015年5月4日



一ノ宮商店街まで来ると買
い物客等も少なく、休んでい
る店も多い。
撮影：2015年5月4日



すずらん商店街は一部空き
店舗や空き地があった。
撮影：2015年5月4日



銀座通り商店街は駅前立地
なので、人通りは多い。
撮影：2015年5月4日



なかまち商店街MAP（2006年8月現在、なかまち商店街作成）

うどん、うなぎ、盆栽

筆者は東京都出身だが、生まれた場所は埼玉県八潮市の母の実家で、そこで1か月ほど暮らした。父の実家は高崎線の神保原駅から徒歩で30分ほどの場所で群馬県に隣接している。子供のころに父の実家に行くと、夜中に「カサコソ、カサコソ」とカイコが桑の葉を食べている音が天井裏から聞こえ、とても怖かった記憶がある。当時から埼玉県は農業県で、水稲や野菜作りが盛んで、小麦や陸稲（おかぼ）も作られていた。貧しい農家だったので、田舎では昼食は必ず祖母が打った「うどん」だった。香川県の「さぬきうどん」が全国一だが、埼玉県でも「うどん文化」が根付いていて、「加須うどん」「武蔵野うどん」「川幅うどん」など地域特有のうどんのほか、チェーン店の「山田うどん」があり、生産量は日本第2位だ。群馬県もう

仲原正治

の

まちある記

どん生産量第3位なので、県北の父の実家もうどんが常食だったのだろう。埼玉県はうどんが有名だと思い、大宮・浦和駅前を散策したが、蕎麦店はたくさんあるが、うどん専門店を見つけることができなかったのは残念だ。

浦和駅のコンコースには「うなぎ店」のパネルやマップが掲載され、毎年5月下旬には市役所で「浦和うなぎまつり」が開催されている。うなぎの歴史は古く、縄文時代の遺跡から骨が発掘されている。8世紀に編纂された万葉集には、大伴家持が「石麻呂 吾物申 夏瘦 跡 云物 武奈伎取 喫」（いはまろに われ ものまをす なつやせに よしといふものぞ むなぎとりめせ）

「石麻呂さん、夏瘦せに良いので、うなぎを獲って食べなさい」と歌っている。

それに対して、吉田石麻呂からは

「瘦々母 生有者 将在乎 波多也波多 武奈伎乎 漁取跡 河 尔流勿」（やすやすも いけらばあらむを はたやはた むなぎをとると かはにながるな）「いやいや、やせても生きていればよい うなぎを獲りに行って 川に流されよりは」という返歌があるのは面白い。

室町時代の料理書にも記載されているが、当時はぶつ切りや小さなウナギに串を打って焼き、味噌や酢に付けて食べていたようだ。江戸時代後半、現在のように身を割きタレをつけて食べることが関西で盛んになり、江戸に入ってきたと言われている。江戸時代、浦和近郊には沼地が多く川魚が豊富で、ここで獲れたウナギを提供したことが始まりで、それが少しずつ有名になり「浦和のうなぎ」の名声が広まったと言われる。この時にはすでに蒲焼と呼ばれており、身を割いて醤油とみりんにかけて出していたと推測される。大正時代になると沼地も少なくなり地場のウナギは獲れなくなったが、「浦和のうなぎ」の伝統は残り、関東のウナギといえば浦和と言われてきた。現在の関東風の白焼きしてから蒸す方式になったのは、明治以降といわれている。



江戸時代から続く旧中山道沿いの「山崎屋」
撮影：2015年5月4日



旅の楽しみは、当地の名物料理。山崎屋の「うなぎ」で昼食、少し日本酒も。
撮影：2015年5月4日

左：浦和駅コンコースにあるウナギ屋MAP

撮影：2015年1月27日

左：ウッド仕様の大宮盆栽村案内図

撮影：2015年1月27日



大宮盆栽美術館には世界に誇る名品や盆栽に関わる美術品などが展示されている
撮影：2015年1月27日



大宮盆栽村のきっかけは、1923年の関東大震災が関わっている。江戸時代、明治・大正期には東京千駄木の団子坂周辺に多くの植木屋が集まり、菊人形づくりや盆栽

仲原正治

の

まちある記



大宮公園駅の近くにある盆栽園・芙蓉園
撮影：2015年1月27日



川の暗渠を活用した「かえで通り」は雰囲気も良く、漫画会館もある。
撮影：2015年1月27日



大宮駅のコンコースは広く、多くの人が集まってくる。
撮影：2015年5月4日



エキナカの「エキュート」は約2300㎡で70余の店舗が営業している。
撮影：2015年1月27日



氷川神社へ続く参道は、古木も多く、快適な遊歩道だ
撮影：2015年1月27日

業を営んでいた。震災後に、安全でより広い土地を求めて盆栽業者が大宮に移り、現在の大宮盆栽村を形成した。東武野田線の大宮公園駅の周辺には9軒の盆栽園、大宮盆栽美術館があり、世界中の盆栽好きが集まってくる。周辺は閑静な住宅地となっていて、「もみじ通り」「けやき通り」「かえで通り」など、歩きやすい道となっている。横浜で造園業を営む友人が普及のために「盆栽カフェ」を不定期で行っているが、水遣りをきちんと行わないと枯れてしまうので、盆栽を育てようとするには、それなりの覚悟と丁寧さが必要だ。

大宮、浦和、駅周辺を散策する

大宮駅を降りると、駅ナカ「エキュート」に数多くの店舗が並んでいることに驚く。大宮駅の2階部分の東西通路（中心通路）は広く、隣接して大宮ルミネ1、ルミネ2があり、併せて4万8600㎡と規模が大きい。西口には大型店舗や高層ビルのオフィスなどが集積し、ペデストリアンデッキがあり、商業施設やソニックシティと繋がっている。東口には、高島屋があるが、それ以外は低層の建物が多く、多くの商店街が並んでいる。かつては埼玉県一の商店街だった一番街商店街のアーケードには飲食店、衣類寝具店や靴店、カメラ店、健康食品店等があり、専門店集団としての商店街を目指している。一番街から一ノ宮通りを進むと氷川神社の参道に着く。氷川神社の参道は、ケヤキやクスノキの古木が並ぶ遊歩道となっていて都心のオアシス空間になっている。氷川神社のある大宮公園には動物園や競輪場、サッカー場などがあり、緑豊かで散歩などには最適だ。

鉄道博物館に行くには、ニューシャトル（埼玉新都市交通伊奈線）が便利だが、大宮駅は新幹線の高架下にある、平日昼間は15分間隔で運行されている。軌道是新幹線と一体となった構造で、鉄道博物館駅の改札の目の前が鉄道博物館の入口となっている。このニューシャトルも新幹線開通の地元対策として作られたが、埼京線とは異なり需要が少ないため、ゴムタイヤ式の新交通システムとなっている。



大宮駅からニューシャトルで一つの鉄道博物館駅を降りると目の前が鉄道博物館のエントランスとなっている（撮影：2015年1月27日）



大宮駅を出発するニューシャトル
撮影：2015年5月4日



ニューシャトルは新幹線と一体となった構造となっている
撮影：2015年1月27日



昭和のレトロを感じさせる夜の「ナカギンゼンセブン」
撮影：2015年1月27日



浦和駅近くの「県庁通り」のレッズ応援フラッグ。
撮影：2015年5月4日



大宮駅近くの「すずらん通り」のアルディージャ応援フラッグ
撮影：2015年5月4日

浦和駅西口駅前には建物が一体となった伊勢丹とコルソが存在感を示し、その先に向かうと、県庁を中心に裁判所、県警本部、さいたま市役所などの官公庁が並んでいる。県庁周辺は超高層ビルがないのでゆったりした空間となっている。西口周辺には「なかまち商店街」などいくつかの商店街があるが、面白かったのは「ナカギンゼンセブン」。戦後のやみ市から始まったといわれる昭和のにおいがプンプンする商店・飲み屋街で、狭い路地に店が並び、値段もリーズナブルで美味しい店も多い。筆者も夜に訪れたが、若者が一人で切り回す和食店や70歳過ぎのマスターが経営するワインバーなど、裏路地を感じさせる雰囲気が好き。

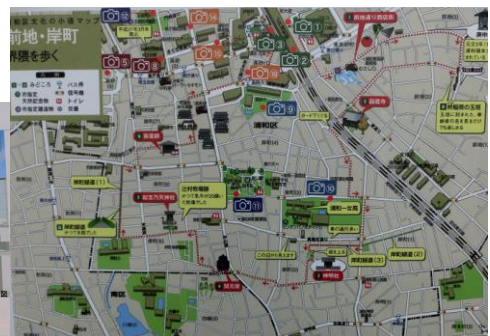
浦和駅周辺には、浦和宿の名残や多くの文化施設があるし、大宮駅周辺には、氷川神社などの歴史を感じさせるものや緑豊かな大宮公園、鉄道博物館のように現代的な施設もあり、それぞれの町が固有の雰囲気を持っている。

サッカーについては、浦和駅周辺の商店街には「レッズ」の、大宮駅周辺の商店街には「アルディージャ」の応援バナーが掲載され、まち全体で応援している。試合の時には浦和と大宮はまったく「さいたま市」を意識せず、競い合っている。特に、「ダービーマッチ」の時にはどうなってしまうのか、ちょっと心配でもある。

政令指定都市になると権限が増えるなどの行政都合で合併はしたが、浦和と大宮はそれぞれが個性をもった町だったので、「さいたま市」を意識して生活しているという感じではない。浦和、大宮というまちの二つ核が違った個性を持っているのだから、商店街等も個性あるものにすることで、東京とは異なった魅力が生まれるのではないだろうか。



左：浦和駅の改築工事による完成予想図（撮影：2015年5月4日）



右：浦和駅周辺の文化の小路マップ（撮影：2015年5月4日）

5) 「小田原評定はまちづくりににあわない」

ー小田原市

小田原といえば、戦国時代に小田原城を築き、5代続いた小田原の雄、北條氏が有名で、今でも北條氏を称え、毎年5月3日には北條五代祭りが開催されている。江戸時代には、東海道の難関「箱根の関所」に向かう宿として発達した歴史ある街だが、現在も小田原には観光で訪れる客よりも、箱根の温泉地などに向かう人が大半で、その中継点として利用されている。今回は、小田原の魅力と現在の課題について考えながら小田原を歩いてみた。



豊臣軍が一夜にして建てたと言われる一夜城の付近には現在スイーツの店「ヨロイヅカファーム」がある。
撮影：2013年12月25日



1590年に小田原攻めをした時の豊臣軍の配置図。
撮影：2015年8月3日



老櫓荘の入り口前の櫓
撮影：2017年5月15日



耳庵の肖像写真(眼力がすごい)
撮影：2017年5月15日

東海道本線が通っていなかった時代

江戸時代まで関八州を統一した後北條氏の城下町として繁栄した小田原は、関東への出入り口として重要な拠点となっていた。この地を統括してきた北條氏が1590年に豊臣秀吉に滅ぼされたのち、江戸時代は主に大久保氏の支配の下、小田原藩として、「入り鉄砲出女」を取り締まる箱根の関所を幕府から預かってきた。当時、小田原は東海道9番目の宿として、箱根超えをする要所の宿場町として栄えた。

明治時代には、温暖な気候と美しい景観で、保養地として、政治家や文人が小田原に別荘を構えた。伊藤博文が建てた「滄浪閣（そうろうかく）」（1890年・明治23年築）は残っていないが、黒田長成が建てた「清閑亭（せいかんてい）」（1906年築）、山縣有朋（首相）が建てた「古稀庵（こきあん）」（1907年築）、大正期の実業家大倉喜八郎が建てた「共寿亭（山月）」（1920年築）などが今でも残っている。

また、「電力王」と呼ばれた松永安左エ門（耳庵）が収集した古美術品を展示する「松永記念館」（1959年築）が公開されている。ここは、「電力王」の松永安左エ門の自宅があった場所だ。松永は1875年（明治8年）長崎で生まれている。30代で福博電気軌道を設立し、その後九州電気を合併し、九州電灯軌道、関西電気、中部電力など、鉄道、電気関係の仕事に従事し、1934年、60歳の時に初めて茶会に出席し、茶に目覚め、本格的に茶道に入ってきた。原三溪や益田鈍翁などと親交を深め、三大茶人とまで言われた。1946年に松下亭（老櫓荘）を建設。当時は15坪程度だった。その後、97歳で亡くなるまで茶を愛してきた。

松永記念館（一部が老櫓荘）には、松永の経歴や書などが展示されているが、たくさん所持していた茶器などは、昭和23年に東京国立博物館に寄贈され、その後、収集したものは、財団法人松永記念財団（昭和34年設立）が解散のうちに、福岡市美術館などに寄贈されたため、現在は小田原にはほとんど展示していない。

仲原正治

の

まちある記



庭の塀は真ん中がへこみ風情を感じさせる。
撮影：2017年5月15日



少し大きな茶室
撮影：2017年5月15日



伊藤博文が建てた「滄浪閣（そうろうかく）」跡地には、伊藤博文の像と碑がある。
撮影：2015年8月3日



清閑亭はNPO法人小田原まちづくり応援団が運営し、様々なイベントを開催している。
撮影：2015年7月20日



大倉喜八郎が建てた「共寿亭（山月）（1920年築）」は現在、使われていないのか、入り口付近は荒廃していた。
撮影：2015年8月3日

「老櫟荘は和室三室よりなる簡素な造りで、東南の庭に面する広間に設けた付書院のある三畳大の床間と、主屋の東北に取りつく玄関及び三畳の寄付茶室の意匠に特徴がある。また、昭和28年に主屋の西南に増築した四畳半台目の茶室は付書院を設けた耳庵好みの数寄屋であり、床間と書院床をもつ内部の意匠が優れている。」
(小田原市HPより)

入館料が無料なので、松永記念館に入ったが、老櫟荘入口には大きな櫟と巨岩（黒部から運んだと言われる）が迎えてくれる。

内装材は、様々な木材が使われていて、奈良の寺で使っていた柱なども活用されていた。自由奔放に茶室をつくっているようで、茶は「なんでもあり」なのかなと思わせる。床の間のある大きな部屋から庭を眺めると、塀の真ん中がへこんで、良い曲線が形づけられていたが、説明を聞くと、当初はまっすぐで、時の経過とともに、真ん中が少し落ちてきたと話していた。

案内人に、老櫟荘の特徴について説明していただいたが、矢継ぎ早によどみなく話していただき、感謝、感謝だ。

本来ならば、ここで一服といきたいところだが、残念ながらそうしたサービスは行われていない。茶室は借りることができるため、様々な人がここで茶会を開催している。



左：江戸時代の小田原市板橋村付近の地図（撮影：2015年8月3日）

右：小田原市板橋地区の昔の別荘などの案内図（撮影：2015年8月3日）

1887年(明治20年)に国府津まで東海道線が延び、89年に国府津—浜松間が開通し、東海道本線は新橋—神戸間の全線が開通した。当時の東海道線は国府津から御殿場経由で沼津(現在の御殿場線)経由だったため、小田原は基幹交通から取り残され、町は少しずつ衰退をしていった。

この時代、小田原に行くには、東京から国府津まで東海道線、国府津からは88年にできた小田原馬車鉄道(国府津—小田原—湯本の旭日橋手前の広場までの約12.9km)に頼っていた。その後、1900年に小田原電気鉄道と社名を変え、国府津—湯



箱根湯本の温泉街に向かう橋のたもとにある、小田原馬車鉄道の駅跡の碑
撮影：2015年8月3日



国府津駅から御殿場線（旧東海道線）と東海道線（左側線路）に分かれる。電車は御殿場線の普通電車。
撮影：2015年7月20日



街かど博物館は、古くから続く店がそのまま博物館として認定され、内部を見ることが出来る。
撮影：2015年8月3日



旧東海道沿いに「ういろう本店」があり、昔ながらの菓「ういろう」や和菓子を販売している。また、「外郎（ういろう）博物館」がある。
撮影：2015年8月3日

本間の電車運転を開始している。

小田原—熱海間（約 25.6 km）には、1896 年に豆相人車鉄道（ずそうじんしゃてつどう）という、人間が客車を押す世界でも珍しい鉄道が開通している。当時、駕籠で約 6 時間のところを 4 時間で走ったと言われている。1908 年には蒸気機関車による軽便鉄道になったが、1923 年の関東大震災で寸断され、廃業した。一方で、1922 年に小田原—真鶴間に熱海線が開業し、24 年に熱海まで延長している。

こうして東京から保養地の箱根湯本や熱海までは乗り継いで行けるようになったが、東海道本線が小田原、熱海を通ることは、地元の悲願だった。御殿場経由の線路は急こう配で補助機関車の連結が必要で、豪雨による土砂崩れの被害などもあり、1918 年に丹那トンネルが着工された。大量の地下水や崩落事故などで死者 67 名という多数の犠牲者をだし、着工から 16 年目の 34 年に完成している。施工は鹿島組が手掛けた。これにより、東海道本線は国府津から小田原、熱海経由で沼津へのルートに変更され今日に至っている。東海道本線のルートが変わったことにより、箱根、熱海へ向かう中継地としての役割も高くなり、少しずつ町は活気を取り戻していった。

中心市街地に人が集まらない

小田原市は 1940 年に市制に移行した。当時の人口は約 5 万 5000 人だった。その後、終戦時の 45 年には約 6 万 5000 人、高度成長が始まった 55 年には約 11 万 3000 人と増え、20 世紀後半 20 万人を超えピークを迎え、その後は減少し、2015 年 8 月 1 日現在 19 万 4304 人となっている。

2013 年 3 月 29 日に認定された「小田原市中心市街地活性化基本計画」の統計データを読むと、いかに小田原の中心市街地が衰退してきたのかがわかる。

1989 年（平成元年）から 2012 年の 23 年間で、市の人口は 2.6%増加したが、中心市街地に限ると 12%の減少。年間商品販売額は、1991 年から 2007 年の 16 年間で、市全体では 38.2%減だが、中心市街地では 55.4%減と大幅な低下。主要商店街の合計流動客数は、1989 年からの 22 年間で 162 万人から 62 万人と 61.6%減となり、商店街への人の流れが極端に減っている。中心市街地の空き店舗率は 2003 年に 9.3%（164 店舗）だったものが、2011 年には 17.9%（322 店舗）に増えている。入込観光客についても、1992 年から 2010 年の 18 年間で、中心市街地は 34.3%減と大幅に減少している。中心市街地はどの項目をとっても大幅な減少で、商業活動は停滞し、空き店舗や未利用地が多くなっていることが統計からも伺える。

こうした中心商店街の衰退の原因のひとつとして考えられるのは、郊外の中里地区に 1993 年に大型商業施設ができ、2000 年には増床し、約 6 万㎡の「ダイナシティ」ができたことがあげられる。

仲原正治

の

まちある記



駅に近い錦通り商店街は、賑わっている。
撮影：2015年8月3日



地元の魚屋もあるが、チェーン店も多いダイヤ街商店会。
撮影：2015年7月20日

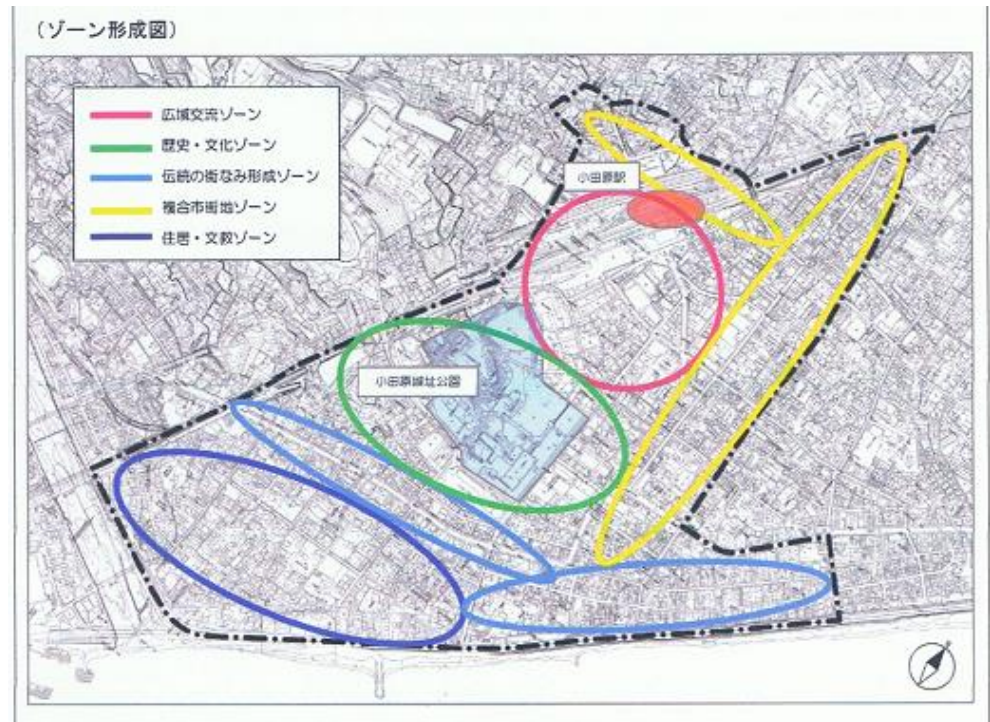


駅から離れた竹の花通りでは商店も少なくなっている。
撮影：2015年8月18日



24店舗が営業する地下街ハルネ案内板
撮影：2015年7月20日

小田原市中心市街地活性化基本計画では、小田原駅周辺から海側の約170haを中心市街地区域と規定している。



黒く縁どられた部分が、170haの中心市街地（小田原市ホームページ）

「フローからストックによる中心市街地の再生」を活性化のテーマに、「訪れたい・歩きたくなるまちづくり」「住みたい・暮らしやすいまちづくり」「持続可能な地域経済の再構築」の三つを基本方針に、将来像として「歴史都市として培われてきた地域資源や人々のなりわいを通じて、多くの人が行き交い、豊かな時間を味わうことができるにぎわいのある中心市街地」を目指している。実現のために、清閑亭、街かど博物館の活用や文学館、芸術文化創造センター、小田原城跡本丸の整備、空き店舗活用、小田原地下街再生事業、お城通り地区再開発事業など幅広いハードの整備事業を掲げている。

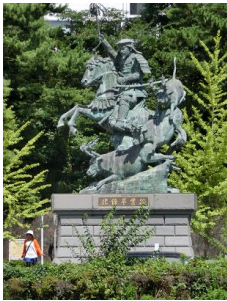
どこの都市でも中心市街地を広く設定する傾向にある。地域を平等に扱いたい気持ちは理解できるが、170haという広大な市街地を対象にして何かコトを起こすのは難しい。もっと地域を絞って、集中的に成功モデルを作り、それが周辺に染み出ていくような仕組みを考えるべきではないだろうか。

小田原駅前地下街整備計画と駅前商店街

JR小田原駅の改札を出ると、アーチ状の屋根が高く、通路も広く立派だ。西口側に新幹線ホームがあり、西口駅前広場はタクシー・バスの乗降場となっていて、片



小田原駅西口広場
撮影：2015 年 8 月 3 日



小田原の基礎をつくった北
條早雲の像
撮影：2015 年 8 月 3 日



ハルネ内の店舗、「菜の花
暮らしの道具店」。
撮影：2015 年 7 月 20 日



自由に休憩できる「ハルネ広
場」
撮影：2015 年 8 月 3 日

隅に北條早雲の像が設置されている。

海側の東口駅前には、2014 年 11 月 1 日、ショッピングとコミュニティ空間が融合した地下街「ハルネ小田原」がリニューアルオープンしている。総事業費は約 25 億円。年間売上額は約 17 億 6 千万円を見込んでいる。地元特産品の野菜や干物などを扱う店、伝統工芸品、地産池消をテーマに掲げた店や生活雑貨など、24 店舗が営業している。また、地域の魅力を案内する「街かど案内所」や、イベントやワークショップのできる「ハルネ広場」も併設されている。

地下街は、小田原地下街株式会社が 76 年に 66 店による「小田原駅前地下街」としてオープンしていた。しかし、2002 年に 17 億円の負債を抱え倒産、その後、新会社を受け継がれたが、売り上げの減少により 2007 年 6 月に営業を終了し、地下道だけが利用される状況となっていた。

小田原市は「小田原地下街再生計画」を 2012 年に発表し、事業に取り組んできた。ここでは「日常と観光が重なる楽しさの創造」をコンセプトに、地下街を日常的な目的で利用する市民と観光目的で利用する来街者との交流によって、地域振興など新しい価値を備えた公共空間を創出するとうたっている。小田原の魅力の再発見（地域住民）と新発見（観光客）し、地下街から街なか・地域への回遊を促進させ、「にぎわい」と「新たな価値」の創出を狙っている。地下街は小田原市の直轄事業として、駅ビル「ラスカ小田原」を運営する JR 東日本の子会社「湘南ステーションビル」に運営を委託している。

筆者が小田原へ来ると必ず立ち寄る、「菜の花」の経営する陶磁器、ファッションのギャラリーが近くのビルから地下街に移ってきている。地下街の全体の店舗構成を見ると、地元の特産物や野菜、干物などの店はあるが、観光客相手なのか、地元向けなのか、中途半端な感じがする。

東口から海に向かう道路沿いには、小田原駅前商店街、その先に駅前通り商店街があり、その通りの左右に様々な商店街が並んでいる。駅に近い「小田原東通り商店街」は、重量感のあるアンパンを売っている「守谷のパン」や肉屋、魚屋、干物店、飲食店などがあり、別名「おいしいもの横丁」と呼ばれている。緑一番街商店街、錦通り商店街、おしゃれ横丁、お堀端通り商店街など駅周辺には 10 を超える商店街が並んでいる。個性ある店や特産品を扱っている店などもあるが、ほとんどが地元向けで、駅に近い商店街は活気があるが、駅から離れると少しずつ寂しくなっている。

小田原駅前には 1959 年に開店した箱根登山デパートがあったが、売り上げ不振で 80 年に業務転換し箱根登山ベルジュという専門店に変わり、2013 年 3 月に閉店している。また、古くからあった「志澤」は 1998 年に閉店、駅前の丸井も 2002 年に閉店、地下街を含めて大型商業施設は次々に閉店していった。志澤は取り壊され、

仲原正治

の

まちある記

その跡地には「万葉の湯」ができています。箱根登山ベルジュの跡地は、2015 年 11 月開業予定で、地下 1 階、地上 4 階建て、延床面積 1948 m²の商業ビルの工事中だ。小田原には、かまぼこ、ひもの、木工などの地場産業が古くから栄え、今に伝える地域資産がたくさんある。そこで、小田原駅周辺や旧東海道沿いで、歴史があり現在も営業している店に昔の資料を展示してもらい、体験できる「街かど博物館」事業を進めている。



「守谷のパン」のある小田原
東通り商店街
撮影：2015 年 7 月 20 日



ファッション系や飲食店が
集積する「おしゃれ横丁」
撮影：2015 年 8 月 3 日



「おしゃれ横丁」の一角にあ
る北条氏政・氏照の墓
撮影：2015 年 7 月 20 日



駅前の「箱根登山ベルジュ」
の跡地では新規施設の工事
が進んでいる。
撮影：2015 年 8 月 3 日



小田原駅前周辺案内図。通りごとに商店街があるようだ。（撮影：2015 年 8 月 3 日）

二転三転の芸術文化創造センターとお城通り地区開発事業

小田原市では三の丸地区で、1999 年に新ホール（仮称：城下町ホール）建設の検討委員会が発足し、2009 年完成予定で準備を進めていた。当時、設計コンペが行われ、山本理顕設計工場の案が選ばれた。しかし、この案を巡り、市民から反対運動が起こり、ホール建設の見直しを公約に掲げた加藤憲一氏が市長に当選し、計画は白紙撤回に追い込まれた。

市長はブログで「コンペの正当性よりも、市長選挙で示された民意がはるかに重い」ということ、今回の一連の議論の中で市民ホールに対する市民意識は大きく進化したこと、それらを受けて、小田原の未来に繋がる文化創造の拠点作りという視点のもと、今は全精力を新たなホールづくりに向けている、ぜひそのプロセスを見守って頂きたい」と述べている。



三の丸地区の芸術文化創造センター予定地の敷地、目の前が小田原城のお堀になっている。
撮影：2015年8月3日



芸術文化創造センター予定地の前に掲示されている「芸術文化創造センター 建ちます」の看板には、センターの完成予想図(写真右下部分)が掲載されている。
撮影：2015年8月3日



「芸術文化創造センター」とほぼ同規模の「小田原市民会館」(大ホール1962年築、本館1965年築)。奥の低層の建物が大ホール棟
撮影：2015年8月18日



小田原駅前の「お城通り地区」の再開発事業用地、広域交流施設ゾーンの敷地撮影
影：2015年8月3日

その見直し公約では、三の丸地区ではなく、駅前の複合ビル予定地「お城通り地区」に場所を移す予定だったが、敷地面積の問題や騒音対策などから、もとの三の丸地区に建設地を戻し、「芸術文化創造センター」を建設することとなった。この間の経過をたどると施工主（行政側）と住民との対話不足や手続きなどに瑕疵が見られ、コンペ当選者の設計者の地位が脅かされ、混乱するなど、反省すべき点が多い。

「芸術文化創造センター」の設計についてはコンペをやり直し、2013年3月に新居千秋都市建築設計が最優秀案に選ばれた。1100席の大ホールと289席の小ホール、展示ギャラリーや大中小のスタジオを備える延べ面積9706㎡の総合的な文化施設となっている。総事業費は55～60億円の予算が見込まれており、2015年10月に着工、17年9月に完成する予定としていた。しかし、昨今の工事費の高騰によって、費用が膨らむことが懸念されていた。その矢先、2015年7月に行われた入札で、入札額が予定価格を20億円上回る価格だったため、結局、取りやめた。小田原市には1965年に建てられた市民会館（1098席の大ホールなど、延べ面積約8700㎡）があるが、芸術文化創造センターの建設に伴い、閉鎖される予定となっている。駅からすぐの「お城通り地区」の再開発事業は、駐車場施設ゾーンと広域交流施設ゾーンに分かれている。駐車場ゾーンには、1階に（仮称）市民活動交流センター、駐輪場などが設けられ、2階から5階及び屋上が368台収容の駐車場で、小田原市の外郭団体である一般財団法人小田原市事業協会が事業施行者となり、2015年10月竣工を目指して工事を進めている。

○土地利用の方針図



左：小田原駅前の「お城通り地区」の再開発事業用地、土地利用方針図

右：広域交流ゾーン施設イメージ(小田原市ホームページ)

○広域交流施設イメージ ※建物の高さを最高限厚の31mとした場合



広域交流ゾーンは商業、ライブラリー、子育て支援機能、コンベンション機能やホテルを併設する計画になっているが、今後、「小田原駅東口お城通り地区再開発準備組合」の意向を確認しつつ、事業者を公募して進める予定となっており、2017年度着工を目指している。

市では施設整備の財源は、国の「暮らし・にぎわい再生事業」と「都市再構築戦略事業」(旧まちづくり交付金)を併用して活用する方向で調整しているといっているが、準備組合のホームページを見ても、進捗状況はわからない。

芸術文化創造センターの建設と小田原駅東口お城通り地区再開発に関しては、2014年に建設延期を求める約1万5千人の署名が市民有志によって提出され、市議会への陳情も出されてきた。市財政が厳しい中、多額の将来負担を強いる大型公共事業であること、文化、商業施設よりも、市民の安心・安全のためのインフラ整備に力を入れるべきという意見も強く、市民の合意も不十分などと指摘されている。小田原市にとっては、懸案のホール建設だとは思いますが、将来の人口減、財政状況などを考慮すると、駅前の再開発施設とのすみわけを明確にして、現在の市民会館の全面改修などにより経費削減を図っても良いのではないだろうか。

※「暮らし・にぎわい再生事業」：中心市街地の再生を図るため、内閣総理大臣による中心市街地活性化基本計画の認定を受けた地区について、都市機能のまちなか立地、空きビル再生、多目的広場等の整備等を総合的に支援することにより、まちなかに公共公益施設等の都市機能等の導入を図る。（国土交通省ホームページより）

※「都市再構築戦略事業」：拡大した市街地において、人口密度の低下や高齢者の急増により都市の生活や企業活動を支える機能（医療・福祉・子育て支援・教育文化・商業）の維持が困難となるおそれがある中、まちの拠点となるエリアへ医療・商業等の都市機能を導入し、まちの活力の維持・増進、持続可能な都市構造への再構築の実現を図ることを目的とする。（国土交通省ホームページより）

小田原といえば・・・

小田原の建物といえば、小田原城を思い浮かべるが、1400年代中頃に大森頼春により築かれている。1495年頃には伊勢宗瑞（そうざい：後の北條早雲）が進出し、5代約100年間北條氏が統治した。徳川幕府になり、大久保氏、稲葉氏、阿部氏などが小田原城主となっていたが、1703年の元禄の大震災により石垣は崩れ、天守閣も全焼している。その後再築され、いくつかの災害による被害を受けたが、箱根の関所を控えた関東の防御の要として幕末まで続いた。1870年（明治3年）に廃城となり、天守閣などが解体され、関東大震災時には石垣が崩れ落ちるなどの被害を受けた。1960年（昭和35年）天守閣を復元、その後、常盤木門、住吉堀、銅門（あかがねもん）も復元、2009年には馬出門（うまだしもん）が復元され、現在の姿となっている。現在、小田原城天守閣は耐震改修工のため2016年4月下旬まで立ち入ることはできない。

まちづくり関係では、小田原市は2006年に天守閣の高さを基準とした建築の高度規制を実施し、小田原駅周辺地区において、天守閣の標高（68.3m）を超える建築を制限している。

仲原正治

の

まちある記



左：現在の小田原城の案内図（撮影：2015年8月3日）

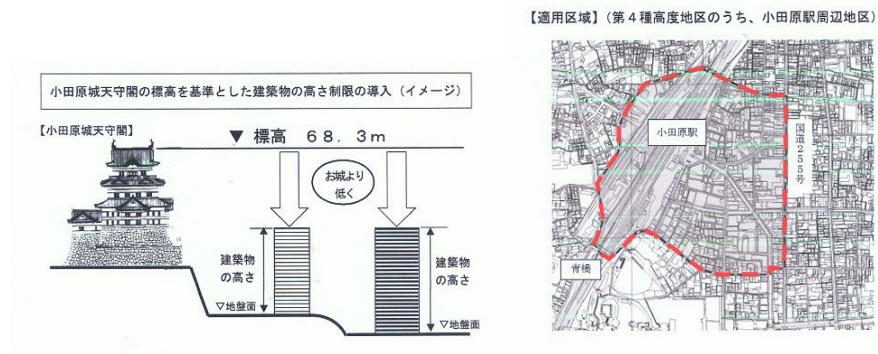
右：小田原城の天守閣は耐震工事中で立入りが禁止されていた（撮影：2015年8月3日）



報徳二宮神社にある薪を背負い本を読む「二宮金次郎像」
撮影：2015年8月3日



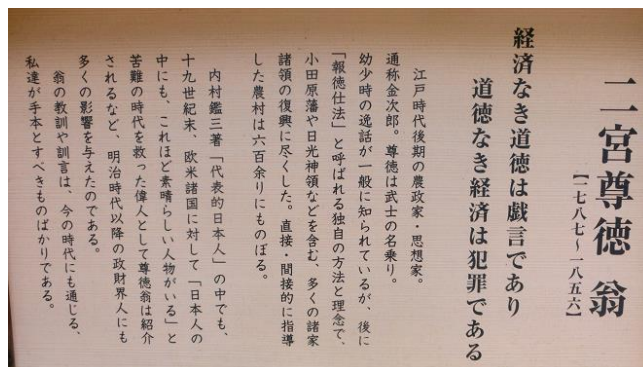
通称「かまぼこ通り」、現在は風祭地区に移転した「鈴廣」もここを拠点にしていた
撮影：2015年8月3日



左：小田原城天守閣の標高を標準とした高さ制限図（小田原市ホームページ）

右：高さ制限区域図（小田原市ホームページ）

小田原の人物といえば「二宮尊徳（1787－1856）」が思い起こされる。彼の名言「経済なき道徳は虚言であり、道徳なき経済は犯罪である」は、経済と道徳の融和を唱え、私利私欲に走らずに社会に貢献すれば、いずれ自分に還ってくるという考え方で、現在にも通じるものだ。この報徳思想に基づいた報徳仕法と呼ばれる農村復興事業を進め、直接・間接的に指導した農村は600余にのぼり、多くの農民や藩を貧困から救った。



報徳二宮神社にある「二宮尊徳翁」説明文（撮影：2015年8月3日）

戦前には勤勉な尊徳(金次郎)が薪を背負って、本を読む姿の銅像が各地で飾られていた。この像は、昭和3年に神戸の中村直吉夫妻が寄進したもので、富山県高岡市の三代目慶寺丹長(けいじたんちょう)作と言われており、約1000体が作られ、各地の小学校などに設置されたが、戦時中の金属の供出で、そのほとんどが失われている。

小田原名物というと「かまぼこ」が筆頭で、そのほか干物などの海産物、漬物、和菓子、木製品、ちょうちんなど様々ある。

かまぼこは「鈴廣(すずひろ)」や「籠清(かごせい)」などの大手企業以外にも個人の店で作っているところも多い。「かまぼこ」は室町時代からあったと言われており、「蒲の穂」に似ていることから名づけられたという説が有力だ。当初は焼ちくわのように焼くのが主流だったが、江戸時代の終わりころに蒸し蒲鉾が登場する。小田原地方では江戸時代に沿岸漁業が盛んでたくさんの魚が獲れたため、売れ残りを処理する方法として、全国各地でつくられていたかまぼこを参考にして小田原かまぼこを造ったといわれている。当初は、棒に巻いた生地を塩で味つけし、外面を火で焼いていたが、それを改良し、長方形の小板に楕形の生地を塗りつけ、蒸し上げる板かまぼこが主流となった。



1932年に建設された旧網問屋を再整備した「小田原なりわい交流館」は、お休み処として観光客の交流の場として利用されている。
撮影：2015年8月3日

小田原評定はまちづくりには似合わない

小田原市のまちづくりは、小田原城をはじめとして、旧東海道沿いの観光施設をアピールして、観光都市を目指すのか、東京・横浜などのベッドタウンとして「住みやすく、過ごしやすい街」を目指すのか、どっちつかずの気がしてならない。観光ならば、関東地方の保養地のメッカともいべき箱根がすぐそばにある。箱根で売られている土産は、小田原で作られたものが多い。それをもっとアピールしていくことも必要だ。市内を歩くと、旧東海道沿いには歴史的な建物や老舗の店を多く見かけるし、小田原城を中心に、様々な魅力を発見できる。しかし、それがあまりうまく観光客には伝わっていない。



立ち寄った「旧三福」では、若者がお茶のワークショップを楽しんでいた。
撮影：2015年8月18日



旧跡が並ぶ小田原宿の街道図。(国土交通省 関東地方整備局 横浜国道事務所ホームページ)

仲原正治

の

まちある記

市は文化施設などのハード整備に力を入れ、商店街の振興を進めているが、「若者」を育てる政策や事業があまり見えてこない。今回、小田原を歩いていて、偶然に見つけた旧中華料理店を活用した「旧三福」というイベント、シェアスペースで、不動産を扱う若者に会った。彼らは使われなくなった製麺所を木工家の作業場として貸し出すなど、空き店舗などを活用して、そこに起業する人などをマッチングすることを進めていた。こうした事業を、行政が応援するような仕組みを作っていくべきではないだろうか。まちづくりは「人づくり」であり、若者を育てることを進めないと未来は見えてこない。

「小田原評定」という言葉がある。1590年（天正18年）、小田原城主の北条氏直が豊臣秀吉の軍勢に包囲されたとき、城内で籠城か野戦か和睦かの評議が長引き、結論がでないまま滅ぼされたことから「長引くだけで、一向に結論が出ない相談」の比喻（たとえ）として使われている。今の小田原のまちづくりを見ると、芸術文化創造センターやお城通り地区開発事業がコロコロと変遷し、作ろうとする時には、時機を逸して工事費の高騰を招くなど、どうも中途半端で、まるで現在の小田原評定になっているのではないかと感じた。



1932年に建設された旧網問屋を再整備した「小田原なりわい交流館」は、お休み処として観光客の交流の場として利用されている。
撮影：2015年8月3日



大型機械がある作業場所
撮影：2017年5月15日



麺の乾燥室は、木材の乾燥室として使われている。
撮影：2017年5月15日

「後日談」

3年ほど前に小田原を訪ねたとき「三福」というクリエイティブなスペースで麺工場を工房にすることを進めていると聞いていた。その後、横浜に帰ってきて、横浜市芸術文化振興財団のSさん（芸術不動産事業担当）とその話をしたら、自分の実家ですということで、一度は訪ねたいと思っていて、2017年5月に訪問が実現した。オーナーであるSさんのお母さんと太田さん夫妻が迎えてくれた。

太田木工への道の途中には「下田豆腐店」（街角博物館）や「内野邸」（1903年築）があり、昔の別荘地の名残が少しある。

「太田木工」の建物はほとんど手を入れていない。製麺の機械があった場所は、木工の大きな機械が設置され、作業場になっている。入って右側の昔の麺の乾燥室は、そのまま木材の乾燥室に転用されている。そのため、ほとんど手を入れずに工房として活用できるようになっている。そういえば以前、Sさんから乾麺をいただいたことがあるが、ここで作られていたのかと思うと感慨深い。

太田さんは約1年半前に隣町から移転してきたとのこと。工房には様々な色彩の寄木が並び、乾燥室には沖縄をはじめ、日本中の木材が立てかけられ、小さな寄木もたくさん置いてある。いくつかの工事費は、Sさんの両親が自主的に負担し、賃料も格安と聞いた。

話を聞くと、私の知り合いの茶人、Aさんの茶箱も制作したとのこと。太田さんは若手の寄木細工の職人として、いま、注目されている。

仲原正治

の

まちある記

こうした活動によって、使われていない施設・資源が、次の世代に続いていくことは、今後の小田原市だけではなく、日本の中小都市の活性化やまちづくりの参考になると思う。

「仲原正治のまちある記―「県庁所在地規模の都市の課題」

著者：仲原正治

発行：2017 年 8 月

「仲原正治のまちある記」は日経ＢＰ社「ケンプラッツ」の記事を加筆・訂正したものです。この文章及び写真（提供写真を除く）については、出典さえ明らかにしていただければ「著作権フリー」です。

仲原正治（なかはら まさはる）略歴

(株)M Zarts クリエイティブ・ディレクター(陶磁器・現代アートギャラリー)

1949 年東京生まれ。 1974 年東北大学法学部卒業。

文化芸術によるまちづくり及びクリエイティブシティ政策の専門家。

2011 年 4 月から 2015 年 12 月まで、日経ＢＰ社の総合サイト「ケンプラッツ」に「まちある記」を連載。全国の中心市街地、東日本大震災の被災地のレポートなど、特徴あるまちづくりを紹介している。

主な著書：「横浜市創造都市事業本部 2586 日の戦い」（インターネット出版）。

現在、ＮＰＯ法人黄金町エリアマネジメントセンター理事、赤煉瓦ネットワーク通信員。